支那文學(文章講話)目次

文章の責任……一
立言の結果……一〇
漢文の體裁……一七
文章の作法……三八
第一通用義理則……四四
第二通用養氣則……四七
第三通用才識則……五四
第四關世教則……五九
第五占地步則……六二
第六立論正大則……六四
第七用意奇巧則……六六
第八造文平淡則……六八

支那文學(文章講話)目次終

支那文學（文章講話）

講師　日下寛講義

文章の責任

文章を講ずるに當りて、第一に心得置くべき事は文章の責任なり。凡そ文章は、人々の語言より成り立ちて、其思意感情を表明し、以て無窮に垂るゝ者なれば、其種類固より多端にして、何事を記し何事を述ぶるも、左まで差支のあるべき理なし。然れども尚も文章と稱する以上は、道義を以て根柢と爲し、名教を維持するを以て目的と爲さゝるを得ざるは古今の通義たり。但し世には一種の小說游戲文ありて、巧に人情を寫し、專ら時好に投ずるを以て目的とする者もあれば、強ちに道義のみを主とすれば、或は局量偏狹なるを疑ふ者もあるべけれど、小說は小說とし、游戲文は游戲文として、別に從事する名教外の人物あれば、自ら其徒に一任して可なり。而して士君子の學ぶべき所は、道義の文、即ち名教を維持する所の經天緯地の文たらざるべからず。斯く言ふときは、少しく極端に走るの嫌ありと雖も、古人は爲文不關世教雖

工何益。とさへ謂ふ者あり。此れ斯文に從事するものゝ潛心默識して玩味すべき所とす。

さて人の語言は一時に通用するに止まるも。之を文字の上に形容して。簡冊に筆するときは千萬世の後に至るまでも消滅するの期なきを道理とす。而して宇宙間の森羅萬象も。文に非ざれば傳ふる能はず。國家の制度典章も。文に非ざれば傳ふる能はず。人生日用彝倫の敎も。文に非ざれば傳ふる能はず。世の治亂盛衰。人の忠奸淑慝より。聖賢君子の前言往行。又は英雄傑士の奇勳偉畧に至るまで。文に非ざれば傳ふる能はず。天下一日も廢すべからざる者は文章なり。故に文章の是非善惡は。大にしては國家の榮辱に關し。細にしては一身一家の毀譽得喪にも係る者なれば。其辭を屬し事を比し。文章を作爲するに當りては。如何にも愼重にして。苟且にすべからざるは勿論の事にして。易に修辭立其誠とあるも。全く之が爲めなり。左傳には太上立德其次立功其次立言とあり。立言とは即ち文章を謂ふなり。此れ後世に三不朽の說の由て起る所以にして。文章は實に三不朽の一に居る。夫れ天下を經綸するの道に於て。德と功とは赫々たる光輝を以て。眼前に人の視聽を發動するの能あるも。文章

は其必要なるにも拘はらず。言は間接の事業にして。當世よりは寧ろ後來の結果を期望するものなり。然るに其間接の事業たるに過ぎざる文章を以て。赫々たる光輝ある所の德と功とに配して三不朽と稱し。以て鼎足の位置に立つは。文章の勢力も亦盛且大なりと謂はざるを得ず。更に一歩を進めて之を論ずれば。德と功とは赫々たる光輝あるに引換へ其の敎化に限りありて。永久に傳ふべからざるも。文章に至りては。萬世に亘りて終期ある事なし。是に由りていふときは。文章の勢力は。二者に比して更に一層の光輝あるものといふも可なり。試に思へ。堯舜は振古の大聖人なり。其德と功とは皆人の贊歎して措ざる所なり。然るに之を孔子の立言に比するときは其德化の及ぶところ。大に長短。誠に日を同うして語るべからざるものあり。故に孟子も孔子を推尊して。生民以來未有孔子也とまで斷言せり。而して孔子の斯く推尊せらるゝ所以は。いかにぞと云ふに。乃ち道德文章にあると言を待たざるなり。されば魏の文帝は文章の効能を稱して。經國之大業不朽之盛事といふに至れり。これ至當不易の確言なり。文章の効能既に此の如しとすれば。其責任の大なる事も亦推して知るべきのみ。

夫れ文章の責任や大なり。而して世の文章を修むるもの。動もすれば輙ち其責任のあるところを忘れて。或は國體を汚損し。或は稱謂を濫用し。以て公然名教の罪人となりて。顧みざるもの少からず。これ豈誠むべく慎むべきの事ならずや。然れども此弊獨今日に始まるのみにあらずして。今よりは二百年も以前なる元祿享保の頃に。徂徠南郭等の徒いでゝ。專ら古文辭學を主張し。漢土の文物に心醉して。護園派の學問大に流行したるより起因するもの多し。今既往に溯りて其陋習のある所の大畧を指摘せんに。先つ物徂徠が孔子の贊に。日本國夷人物茂卿と題したるが如きは。既に識者の笑ふ所となりて。久しく書生の譚柄に供したるものなるも。その國躰の如何をも顧みずして。我國を夷視し。彼土を中華とし。かゝる陋見に陷りしは。たとひ悪意あるに非ずして。情實憫諒すべきものあるにもせよ。我國體を汚損するの點においては。其罪決して免るべからざるなり。夫れ漢土の中國中華を以て自稱し。域外の國々を夷狄視するは。内辭なり私言なり。宇内普通の稱にはあらざるなり。世界の廣き五洲の大なるよりして視るときは。彼も亦東偏の一小國たるに過ぎず。且つ我と彼とは對敵の國にして。既に先皇の制度もある事なり。古は皇華、華夏、中華、中國、中夏、

中土などゝ稱する事は。皆我國のみを指していへる事にて。國史律令を始めとして。私撰の文に至るまでも。此稱謂を誤る事はなかりしなり。勿論中華、中國などいふ事は。全く漢土に摸倣せるの嫌ありて。今日より視れば。穩當とも思はれざるも。去ながらこは先皇の定められたる制度の一にして。建國の事躰に準ぜられたるものなり。此等の制度あるをもしらずして。自ら日本國夷人などゝ書たるは。徂徠の博學鴻儒たるにも不似合の事共なり。昔し漢土六朝の時。南朝よりは北を指して索虜といひ。北朝よりは南を指して島夷といひたる事あり。これ各其國威を張るの意に出たる語にして。我を尊み彼を貶するも。固より當然の事なり。もし南朝の人自ら島夷と稱し。北朝の人自ら索虜と稱するときは。孰れか其狂愚を笑はざるものあるべき。徂徠が如きは。南朝の人にして自ら島夷と稱し。北朝の人にして自ら索虜と稱するの類なり。何ぞ思はざるの甚しきや。又徂徠が文に。天子を指して共主と稱するの語あり。共主とは彼の戰國の人。周王を輕侮していへる詞なり。此不祥の詞を以て我天子に擬するは。實に不敬の極といふべし。又太宰春臺か相中紀行に。歴代天子の宸筆額字の事を記するに。其額は天皇某書と御諱を書せり。恐多き事共なり。假令ひ異代異朝

なりと雖も。帝王を稱するに諱を以てする事のあるべきや。譬へば唐宋の事を後世より錄したる書に。帝世民。帝匡胤などゝいへるが如し。さすがに漢土は禮文の國と稱するだけありて。かゝる不敬の語は。彼土の人の文には決して見ざるところなり。又徂徠は關白豐臣公の事を書して豐王と云ひ。春臺が文には天皇を稱して山城天皇と云ひ。幕府を指して憲王文王と云ひ。室鳩巢が文にも文昭王昇遐などの語あり。しらず何れの時にか關白幕府の王位に即たる。僭亂狂暴これより甚しきはなし。又徂徠南郭等が文に。勝國國初などいへる語あり。此語は革命の後にこそいふべけれ。我國は天孫降臨以後。皇統聯綿として。萬世一系の帝王國なれば。開闢よりこのかた。勝國と指すべき國なし。また國初とは神武帝御宇以後に指すべき時代なし。是皆强て漢樣に操せんとして。知らず識らざるの間に。かゝる悖戾無稽の語をも用うるに至るならん。其他我大日本國を稱して扶桑といひ。或は日東と書し。或は大東世語などゝ書名にまで題せるが如きは。皆事躰を辨ぜざるものゝ所爲にして。苟も學術文章を以て後世に傳へんと欲する者にあり。ながら。此等の大義だにも心付ざるは。嘆息すべきの至りならずや。

凡そ稱謂の淆亂なる。文義の悖謬なる。一々其類を列擧せば。僕を更ふるも盡きがたし。往時此等の弊を矯正せんと欲して。尾藤二洲は稱謂私言なるものを著して。世の學者を警醒せり。然れども其書尙ほ議すべきもの多し。村田春海の時文摘批に至りては。實に我心の同く然るところを獲たるものにて。頗る其要領をつくし。當時の陋習を一洗するに足るものといふべし。其論に云。實錄の文に假飾の文字をつかふ時は。後世の疑を生ずる事なれば。漢土の人の文には昔て無事なり。假飾の文字を用る事は。たゞ風流なる賦の文にのみ有事なり。近時の文人の雅也と思ひて爲す事に。却て俗なる事多く。又其俗稱にて文に入べからずと思ふ事の。却て其儘に記さゞれば。事躰を誤る事あるをばしらざるなり。凡文章の用は。万國に通交して。四方の志を達じ。言事を筆に載せて。是を千歲に傳ふるを要とする事なり。されば是を經國の大業とも言ふ也。菁華を玩ひ纖巧を爭は甚末なる事にて。典藝の類なれば。古の人も雕蟲の小技也とていやしめいべり。さるを今世の儒生は。此文章の本旨を忘れて。たゞ文字の好醜を擇んとするにのみ泥むより。あらぬ乖謬なる稱呼をもいひて。事躰義理を失ふ事をもかへり見ざるは。にくむべく厭ふべきわさ也とあり。是實に學者頂門

の一鎖といふべし。又最後に論して云。大抵近世の文辭は僭妄と虛說と不敬亂俗との四つをまぬかるゝ事なし。當今寬仁の政。これを禁止し給ふ事の無ればとて。縉紳君子文章を以て自任とする人。此悖亂の習俗を改ずして。名教の罪人とならんはなげかはしき事ならずや。畢竟元祿享保の比より沿襲既に久しく。今にては詞客文人の定式の如くなり來れるまゝに。人々皆前人の蹤を追て。たゞ舊轍をのみ守らんとするより。其非を改んものとも思はざるならんか。今我國の古人の文を見るに。六國史の文などは。其文樸素にして通暢ならず。たゞ歲月事蹟を畧載したるのみなれば。捫藻の觀に足べき事は無れど。文字を用る大躰を失はざれば。かくても千載の下に傳へて文の用は足れりといふべし。近時の人の文は。事を記述せるところ。辭采の燦然たる事。大に古人には勝れたれど。皆文字の大躰を失へれば。これを千載の後に傳ふとも。事實皆たがふべければ。文の用を爲しがたし。抑文にして文の用をなさゞるは。俳優兒戲の類とこそいふべけれ。これを雅正の文なりとおもはんは。まどへりといふべからんと。此書は寬政中の著にして。今を距ること殆んど百年前の說なり。今や文運大に開け。鴻儒碩學前後輩出して。文章の旺盛なること復當時の比にあら

ずと雖然れども其得失如何と顧みるに。一害漸く去りて一弊復生ずるの憾なきこと能はざるなり。何となれば。開港已來。歐洲の風俗靡然として東漸し。上は國家の制度典章より。凡百の學術技藝に至るまで。率ね舊習を一洗して。其長處を取ると共に。其短處も亦闖入し。異論新說紛々然と雜出し。著書は更なり。演說に筆記に文學の應用次第に頻煩たるに隨ひ。其利害得失の及ぶところ。國家の面目に關係すること。實に鮮少に非ざるなり。然るに世の文學に從事するもの。其好む所に僻し。舊を厭ひ新に趨るの餘り。未だ嘗て國家の舊典に通曉せざるに。早く已に歐洲の文華に迷眩し。韓子の所謂入者主之。出者奴之。入者附之。出者汙之。といふが如く。自然と彼を尊み我を卑むの弊を生じ。始んど元祿享保間の諸子が漢土の文物に心醉すると一般にして或は我國を稱して新日本といひ。維新革命といひ。野蠻未開といひ。又は小國民。貧弱國などゝ唱へて。毫も憚からざるのみならず。甚しきは歐洲の紀元を假りて我國事を論議し。終には十九世紀等の文字を濫用して。我紀元と混淆するの觀あらしめ。開闢以來數千年間東洋に卓立して。天壤と俱に窮りなき金甌無缺の國躰なるには。しなくも文士の筆端より。冥々の中に毀損して笑を四方万國にまで取るの陋習あ

るに至るは、いと口惜き事ならずや。斯くいへば、或は酷論に失する歟の嫌ありと雖。其弊の底止する所を究むれば、竟に此の如きの有樣たるを免かれざるなり。此皆操觚家の不注意より起るものにして、敢て故意に此陋をなすに非ざるも、其堂々たる國躰に汚點し、名教中の罪人たるは、決して辭すべからざるものあり。故に余は文章を講ずるに先たち、其責任の在る所を詳にし、斯文に從事する者をして、既往に鑒み將來に誡めて、復世の陋習に陷ることなからしめんと欲するなり。

立言の結果

文章に責任のある事は、已に前に述べたる所にて、其大畧は知了するに足らん、これよりは立言の結果といふ事に就て一言すべし。文章は徒に一時一代の爲に其効用を顯はすのみにあらずして、天下万世の後に傳へて其結果を收むる者なり。故に苟も其言の至理にして的當不易なるときは、假令一時に採用せられざるも、必ず後世の知己に遭遇するの機會あるものなり。孔子の立言の如きは固より世界無比にして別段なれど、余は茲に老子の言に就て、實にもと思ひ當ることあり。今日において こそ老子の書も大に聲價を增し、東洋哲學の原理として、孔子の言と並稱するに至

りしなれ、已前に在りては、老莊の書とさへいへば、異端邪說の類に看做して、一隅に屏息せしめられしものなり。然るに世の進化するに從ひ、眞理の發明が次第に精微に入り、歐洲に於て東洋の學理を講究するが如く、我邦にても哲學の講究鬱然と勃興し、今にては何人も、老莊の類を以て、異端邪說として、擯斥するものなきは、勿論なるが、今より二百餘年前に在りて、既に其言の磨滅すべからざる證據には、意外の好結果を得たるものあるなり。そは他にあらず、我東照公嘗て駿府に退隱せられし後、二代將軍の台德公に、老子の語を擧て敎訓せられしことあり。其事載せて大道寺友山の岩淵夜話に見えたれば、左に引て其梗概を示すべし。曰、權現樣御隱居被遊候節、將軍樣より本多佐渡守を以て、御親被遊義有之、御用相濟候已後、佐渡守へ被仰聞候は、我ら若き時分は、世上いそがはしき節故、學問抔に打かゝりて居ることも成らざるに付、一生文盲にて年を寄らせたる也、去ながら老子の詞とやらんにて、足る事を知るものは常に足ると云古語と、仇をば恩を以て報ずるといふ世話と、此二句をば、若年の時分より常に心に不忘して、受用とせし也、將軍には我らとは違ひ、學問抔も有之義なれば、樣々宜しき事共をも知りて居らるべき間、此語を用ひられよと云事

にてはなきぞ。これは其方へ言聞する義也。とある上意には有之候へ共、其段ともに佐渡守被申上候へば、將軍樣御聞被成。御硯とある仰にて、御自筆にて右の二句を御書被遊、御床の内へ御張付させ被遊。其後金地院に清書被仰付。右御自筆の義は内田平左衞門所持のよし。大猷院樣御代御聽に達し、子息信濃守へ被仰付。御城へ御取寄被遊、御床に懸させられ、御上下を召させられ、御拜見被遊候由也とあり。諸君は此に由り如何なる感覺をもたるべき。老子の一語は取りも直さず德川幕府三百年の太平を開きし根本なりといふも敢て不當に非るべし。又水戸の西山公は史記伯夷傳の一篇に感激して、遂に大日本史の大著述を思立に至りたり。其他頼山陽の外史の如きも、維新の洪業を冥助せりとの評あるに非ずや。余は實に立言の苟もすべからずして、文章の影響の廣大無邊なるを贊歎するに勝へざるなり。

茲に顧寧人の日知錄に據るに、立言不爲一時といふ標題にて、畧前說と同意見の事實を記述せり。今其大意を歷擧せんに、曰、言は一時に在るも、其效は數十百年の後に見ゆるものなり。魏志に司馬朗が井田を復ずるの議を載て、さきには民各累世の業あるを以て、中途にこれを奪ひ難かりしが、今大亂の後を承て民人分散し、土地皆公

田となれば、此時に及て井田を復せんと請ひしに、當世また之を行はざるなり。然るに拓跋氏の中原を有つに及び、民戶の絕する墟宅桑榆を合せて、盡く公田と爲し、以て給授口分し、世業の制此よりして起り、隋唐に迄るまでこれを守りしとなり。又魏書に武定の初、私鑄錢の濫惡たりしかば、齊文襄王議して、錢一文の重さ五銖と定め、天下の州鎭郡縣の市に各二稱を置て、市門に懸け、若し重さ五銖ならず、或は重さ五銖なるも鉛鐵を雜ゆるは、並に用うるを聽さゞらんと請ひしに、當世未だこれを行はざるなり。然るに隋文帝の天下を有つに及び、更に新錢を鑄て、文を五銖といひ、重さも其文の如くし、樣を關に置き、樣の如くならざる者は、官に沒收し、開通元寶の式此に準して起り、宋時に至るも猶之に倣へりとなり。又唐書に李叔明が劍南節度使たりし時、上疏して道佛の弊を言ひ、寺を定めて三等と爲し、觀を二等と爲し、上寺に僧二十人、上觀に道士十四人を留め、每等降殺して、皆行ひ有る者を擇ひて、餘は盡く民と爲さんと請ひしに、德宗之を善として、天下に行はんと爲したりしに、尙書省の議に因りて罷む。然るに武宗の會昌五年に至りて、天下の寺觀を省き、上都東都の兩街に敕して、各二寺を留め、每寺に僧三十人を留め、天下の節度觀察使の治所等には

各一寺を留め。分けて三等と爲し。上等に僧二十人。中等に十人。下等に五人を留め。凡そ寺四千六百餘區を毀ち。僧尼二十六万五百人を歸俗せしめ。明の洪武中にも亦稍其法を行へりとなり。又元史に。京師の人口。東南の運糧を恃み。民力を竭して不測に航するを以て。泰定中に虞集建言して。京東數千里。北は遼海を極め。南は青齊に濱し。萑葦の塲海潮日に至り。淤して沃壤となるを以て。浙人の法を用ひ。堤を築き水を捍きて田と爲し。富民の官を得んと欲する者に其衆を合して耕種するを聽るし。能万夫を以て耕す者は。万夫の田を授て万夫の長と爲し。千夫百夫も亦かくの如くし。三年に其成を視て。地の高下を以て徴額を定め。五年に積蓄有りて官を命し。儲ふる所に就て祿を給し。十年に符印を佩はしめ。以て子孫に傳ふるを得ると。軍官の法の如くせば。以て東南の運糧を寛にして。民力を紓ぶべく。游手の徒皆歸する所有りといひしに。其事行はれざるなり。然るに順帝の至正中に及ひ。海運至らざるを以て。丞相脫脫の言に從ひ。司農司を江南に分ち。能く水田に種ゑ及修築の人各一千名を召募して農師と爲し。歳乃ち大に稔す。今に至るも水田の遺利猶存する者ありといふ。皆是立議の人見るに及ばざる所なり。孔子の夏の時を行ふといふも固より是を以て

魯の定哀周の景敬に望まざる也。然るに漢の武帝太初の元に及び。幾んと三百年なりしが。遂にこれを行ふ事を得たり。孟子も滕の文公に告るに。王者起るあらは必來りて法を取らん。是れ王者の師たるもといへり。嗚呼天下の事。其識ある者必しも其時に遭はず。而して其時に當る者或は其識無し。然らば則開物の功立言の用。其れ少くべけんやとあり。此皆立言の結果。百世の得失に關係する實證なり。

已上述たる所は。孰れも立言の好結果ありし古例を舉示するに止れり。請ふ更に其結果の畏るべき者あるを終言せん。總て近來世の有樣を察するに。壯士狂漢の徒日に益横行して。所謂公安を妨害する者少からず。是れ何故に然る歟といふに。余の推量する所を以て視れは。矢張其實を立言者に分擔せしめざるを得ざるなり。何となれば。人の常情。誰か好て世の富貴利達を擲ち。故意に不名譽の事を爲して顧みざる者あるべき。而るに今比々として。これあるは。豈その胸中自ら恃む所なくして然らんや。然らは則果して何を恃むかといふに。是れ大に深思すべき者あるなり。夫れ私憤を一擊の下に逞うし。名を公議輿論に假りて。一世の耳目を聳動せし者。近世櫻田事件に如くこと無るべし。春秋の筆法を以て。論ずるときは。宜く書して盜といふへ

きに、世の儒生學士たる者、其大義名分を正さずして、反て烈士とか義擧とかの名稱を付し、公然其事を贊美して措ざる者の如し、假令ひ其情に於ては憫諒すべき者ありと雖、既に國家の典型を犯して、刺客狂漢の所爲に出たる者は、勢ひ筆誅せざるべからず、然るに名教を維持すべき儒生學士にして、少しも其事を貶せざるのみならず、故らに之を稱揚するの實あるに至りては、世の普通人士に於ては、如何にも尤の事と思ひ做し、竟には赤穗義士抔と並へ稱し、後人をして轉た景慕の念を感起せしむるの傾きあり、是れ實に今日壯士輩の陰に自ら恃みとする所にして、其意に謂ふたとひ一旦は刑辟に觸ると雖も、義烈の名は後世に堙滅すべからずと、されば、こそ或は元老を途上に擊ち、或は大臣を席上に刺し、其身を犧牲にして悔いざる者、踵を接して輩出するに至るなれ、是れ時勢の然らしむる所にして、强ち人力の制すべきには非ずと雖、然れども其禍害の起因する所を究むれば、畢竟儒生學士の名教を度外にして、妄りに其文章を弄し、以て立言の苟もすべからざるを心頭に掛けざるの致す所たるを免かれざるなり、故に操觚家たる者、人の爲に碑銘なり行狀なり詰傳なり、其事實を記述するに當りては、尤も愼重に、其是非曲直の在る處を詳にし、時勢の得失に參同し、然る後に筆を執らざるべからず、立言の結果に因りて其利害の及ぶ所、實に豫想の外に出るもの多し。

漢文の體裁

文章に責任ある事と、立言の結果に因りて世道に大關係ある事とは、既に大審辯したれば、此れよりは進んで作文の體裁に及ぶべし、總て文章を作るに當りては、其體裁の如何を心に自得して、然る後に筆を執るか順序にて、若し是に反するときは、意外の失體を來すものなり、されば文章の體裁を識別するは、作文に臨みての第一義と知るべし、既に古人も、文章は體製を以て先と爲し、精工は之に次くといひ、又た文は體を辨ずるより先きなるは莫く、體正ふして後に、意を以て之を經し、氣を以て之を貫き、辭を以て之を飾る、體は文の幹、意は文の帥、氣は文の翼、詞は文の華也とさへ云り、體裁の識別せざる可らざること此の如し、さて文章の體裁といふは、古今東西彼此異同ありて、種々の類例少からずと雖も、今講ずる所は專ら漢文にあれば、姑く漢文に就て其體裁を言ふ事とせん、北齊の顏之推が說は、文章はもと五經より出て、詔命策檄は書より生し、序述論議は易より生し、歌詠賦頌は詩より生し、祭祝哀誄は禮

より生し、書奏箴銘は春秋より生ずといへり、是れ一家の私言と雖も、亦味ふべきの言と思はる、明の吳訥といふ者は、文章辯體といふ書を著はして、其體を五十九類に分ちたりしが、吳訥より稍後れて徐師曾といふ者出てゝ、吳訥の文章辯體を本據として、更に其意を敷衍し、總て一百二十七類となして、文體明辯といふ八十四卷もある大部の書を著はしたり、斯く多數の部類を立つるに至りたるは、定めて明確詳備の見解ありて然る者ならんと思ひしに、左にはあらずして、是は全く多數を以て吳訥の上に凌駕せんとの私心より出しものにて、清の四庫全書總目などには、大に其謬陋無識なるを非難せり、今其一節を抄出して參考に供すべし、曰、詔誥諸文皆分古體俗體二例、次爲書表諸表、則古體之外添唐體宋體、碑則正體變體之外、又增一別體、甚至墓誌以銘之字數分體、其餘亦莫不忽分忽合、忽彼忽此、或標類於題前、或標類於題下、千條萬緒、無復體例可求、所謂治絲而棼者歟、といふに至れり、されば徐師曾の分類一百二十七の諸體は、全く杜撰鹵莽の所爲にて、取るに足らざる說なれば、此には講ずるの必要なかるべし、然れども其中に就て的確なる諸體を列擧すれば、猶數十種を得るに至る、是れ作文家の一應心得ざるべからざるものとす、今其種類を大別すれば概略左の如し、

詔　勅　上書　表　奏疏　檄　書　策論　說　議　辯　解　序　引　題跋
文　箴　戒　銘　頌　贊　賦　記　傳　墓誌　墓表　行狀　祭文　哀辭

已上の諸體は、特に支那に在りて用ふるのみならず、今日我邦に於ても苟も漢文を講ずる時は其體に依倣せざるものはあらざるなり、請ふ此れより諸體に就て其大要を畧述せん、

詔　詔とは天子の命令を稱する語にて、唐虞三代の頃には、命若くは誥誓などゝいひしが、秦の天下を幷するに及び、命を改て制と曰ひ、令を詔と曰ひしより、後世因襲して之を用ふる事とはなりぬ、字書に詔は昭也告也とありて、昭かに告げるの義なり、漢の文帝が勸農詔、唐の太宗が舉賢令詔の如き是なり、古へは多く散文なりしも、後世は四六體にて、平仄互に用ふるを例とす、

敕　字書を案ずるに、敕は戒敕也とあり、或はいふ敕は飾也、警飾して敢て廢漫せざらしむるなりと、劉勰云、戒敕して文を爲す、實に詔の切なる者なり、周穆王鄧文に命じて勅憲を受けしむるは、此れ其事なりと、漢制に天子の命令に戒書とある

は、即ち戒敕なり、唐には勅旨とも勅書とも勅牒ともありて、宋には勅牒などゝもいへり、古へは散文を用ひしが、後には散文あり四六ありて、散文儷語互用するこ猶詔書の如きなり、

上書　凡そ君に上告するの書を上書といふ、古人敷奏諫說の辭、尙書春秋內外傳に見ゆ、然れども皆口に矢ひ言を陳べ篇目を立てず、降りて七國に及ぶも、事を王に言ふ者、皆之を上書と稱す、蕭統が文選に、其臣下の書と別たんことを欲して、自ら一類と爲す、李斯が諫逐客書の如き是なり、

表　表は標也明也と字書に見えて、事緒を標著明白ならしめ、以て上に告るものなり、古へは言を君に献するは皆上書と稱せしが、漢の世に始て表の字を用ひて、陳請する事になりぬ、後世其用益廣く、論諫なり、請勸なり、陳乞なり、進献なり、推薦なり、慶賀なり、慰安なり、辭解なり、陳謝なり、訟理なり、彈劾なり、施して可ならざる所なきに至れり、漢晉は多く散文を用ひ、唐宋已下は多く四六を用ふ、諸葛亮の出師表、白居易が爲崔相陳情表の如き、一は散文、一は儷語、以て見るべし、然れども韓愈が佛骨表に至りては、全く散文を用ふ、猶古體を存するなり、

奏疏　或は奏對、奏狀、奏啓、奏劄、封事とも稱す、群臣論諫の總名なり、七國以前は皆上書と稱す、秦始て書を改て奏といひ、漢は更に禮儀を定て、恩を謝するを章といひ、按劾するを奏といひ、陳請するを表といひ、異を執るを議といへり、魏晉已下は啓獨り尤行はる、唐は表狀を用て書疏と稱し、宋人は之を損益して劄子あり、狀あり、書あり、表あり、封事ありしも、劄子の用居多なりき、蓋し唐人の牓子錄子の制に本きて、其名を改めしものなり、

檄　釋文に云、檄は軍書なり、說文に云、木簡を以て書をつくり、長さ尺二寸あり、若し急あれば鷄羽を挿みて之を遣る、故に羽檄といふ、其疾きこと飛ぶが如きを言ふなり、其詞散文あり、儷語あり、劉勰云、義を植て辭を颺くる、務めて剛健に在り、或は其休明を述べ、或は彼が苛虐を叙す、天時を指して人事を審にし、强弱を算して權勢を角し、蓄鏃を前驗に標し、盤銘を己に然るに懸け、羽を挿んで以て迅を示し、辭をして緩ならしむ可らず、板に露はして以て衆に宣し、義をして隱さしむ可らずと、以て其體裁如何を察すべし、

書　書は舒なり、其言を舒布して簡牘に陳ふる也と、字書に見えたり、書の用至て

廣し、下より上に對しては奏といひ、啓といひ、狀といひ、疏といひ、牋といひ、劄と云、皆書の總稱なり、簡牘も書の一體にして、簡署に其意を陳るの義を含めり、或は手簡とも小簡ともいひ、又は尺牘ともいふ、簡署の稱なり、秦漢以來、皆親和往來問答の間に用ひ、牋は專ら之を皇后太子諸王に用ふ、皆に辭命議論の二體あるも、共に散文なり、凡て書の體はもと言を盡すにあれば條暢に優柔に其情意を通するを以て主とすといふ、乃ち心腹の獻酬なり、

策　說文に云、策は謀なり、漢書音義に云、簡策難問を作りて案上に列置し、試に在る者意に投し射取して以て之に答ふるを射策といひ、政化の得失を錄して之を問ふ者は對策と謂ふとあり、是れ科場屋に於て試業する文に係れり、又學士大夫私に自ら政を議して上進する者あり、均く之を策といふ、其體各同からず、一に制策といふ、天子制を稱して以て問ひ、而して對ふる者是なり、二に試策といふ、有司策を以て士を試み、而して對ふる者是なり、三に進策といふ、策を著はして以て上進する者是なり、策の體は治を練るを上と爲し、文に工なるを次とす、然れども人才同からず、或は治に練るも文に疎なるあり、或は文に工なるも治に拙なるあり、

劉勰は其選に入る者を稱して通才とせり、蘇家父子の審勢、審敵、策略諸篇の如きは、皆自ら私議するものなるも、文章才識並に千古に卓絶たる者なり、

論　字書に論は議也とあり、劉勰云、論は倫なり、群言を彌綸して一理を研く者なり、論の名を立るは論語に始まる、六籍二論の若きは乃ち後人の追題のみ、其體たるや、然否を辨正し、數あるを窮め、形ちなきを追ひ、堅を迹ね通を求め、深を鉤し極を取る、乃ち百慮の筌蹄、萬事の權衡なり、其條流に至りては、實に四品あり、政を陳るは議論と奏を合せ、經を釋くは傳註と體を參へ、史を辯するには贊評と行を齊ふし、文を詮するは序引と紀を共にす、此れ論の大躰なりと謂の說此の如し、徐師曾は更に之を八種に分ち、一に理論、二に政論、三に經論、四に史論、五に文論、六に諷論、七に寓論、八に設論とせり、

說　說は解なり述なり、義理を解釋して、己の意を以て之を述る者なり、徐師曾云、說の名は易の說卦より起る、漢の許愼が說文を作るにも、亦其名を祖として以て篇に命す、魏晉以來作者絕た少なし、獨曹植の集中に二首あるも、文選に載せず、之を要するに、經義に傳て更に己が見を出し、縱橫に抑揚して、詳贍なるを以て上と

爲すのみ、論と大に異なること無しと、說の論と大異なきは勿論なるが、專ら之を經義に關係するものとするは、陋見と謂ふべし、韓愈の師說、雜說、柳宗元の捕蛇者說等の如き、果して如何ぞや、其他名說、字說の類ありて、徐氏は別に一體と爲すも、所謂取るに足らざるの妄說なり、

議　劉勰云、議は宜なり、周く爰に諮謀して以て事宜を審にするなり、周書に事を議して以て政を制すれは乃ち迷はすといふは、此の謂なり、昔し管中稱す、軒轅氏明臺の議ありと、則議の來ること遠し、漢に至り始て駁議を立つ、駁は雜なり、雜議して純ならず、故に駁と曰ふ、蓋し古へは國に大事あれば、必ず群臣を集て、之を廷議し、口を交へて往復し、務めて其情を盡す、鹽鐵を罷め匈奴を擊つの類の若き、是のみ、厥後公卿に下して議せしむ、乃始て詞を撰て之を簡牘に書し、以て進む、學士偶見る所あれば、又復私に家に議す、或は今を商り、或は古を訂す、是に由て議寖く盛なり、然れども其大要は經に據り理を析ち、時を審にし勢を度るに在り、文は辯潔を以て能と爲し、繁縟を以て巧と爲さず、事は明覈を以て美と爲し、深隱を以て奇と爲さず、乃ち深く議體に達する者と爲すのみと、議に奏議私議の二體あり、韓愈

の復讐議、柳宗元の晉文公問守原議の如き以て見るべし、

辯　字書に辯は判別也とあり、其字たる、言に從ひ、或は刀に從ふ、其言行の是非眞僞を執りて、大義を以て之を裁斷するなり、漢以前に在りては作る者なし、故に文選に所見なく、劉勰も亦其說を著さず、唐の韓愈柳宗元に迨ひ、始て諱辯、論語辯などの篇出てゝ其集に見えたり、然れとも其原を推究するに、實は孟子、莊子の諸家に胚胎し、未だ篇目の設なかりしものを、韓柳二氏に至りて其篇自を立てゝ以て一體と爲したるに過きざるなり、蓋し至當不易の理に本き、反復曲折の詞を以て發揮するに非ざれば、未た能く工なる者あらざるなり、

解　解は釋なり、人の疑惑あるに因りて、之が解釋を爲すものなり、漢の楊雄始て解嘲を作りしより世遂にこれに倣へり、其文專ら疑惑を辯釋し、紛雜を解剝するを以て主眼とす、論說議辯の類と相通ずる者なり、雄の文は諧謔廻環にして、譏りを正士に取ると雖も、其詞の工なるに至りては、實に此體の開創者たるに愧ちざる者あり、韓愈の獲麟解、進學解の如きは、蓋し之を祖述して以て正に師せし者なり、此外又た字解釋言等あるも、其體たる大意皆同じからざるはなし、

序　序は緒なり、其字或は叙に作る、又た贈序、送序の體あり、其善く事理を叙して、次第順序ある事、緒の緒あるが若きをいふなり、其體たる大要二種あり、一に議論躰とし、二に叙事躰とす、叙事の内又た正變二躰あり、又た序略名序字序等もありて、並に序の一體と爲す、歐陽脩の釋祕演詩集序、韓愈の贈崔復州序、及送董邵南序等は議論躰なり、柳宗元の愚溪詩序は正躰にして叙事なり、韓愈の送李愿歸盤谷序の如きは變躰なりと知るべし、

引　引も亦序の一躰なり、然れども唐以前の文章に在りては、未た引と名つけたる者あらず、漢の班固に典引の作ありと雖も、實は符命の文にして、引を以て稱すべきものに非ず、唐以後に至り、始て此體あるなり、大畧序の如くにて、稍短簡なる者を名づけて引とは爲すなり、宋の蘇洵の送石昌言北使引の如き、以て其一斑を窺ふに足れり、

題跋　題跋は簡編の後に書するものなり、凡そ經傳子史詩文圖書の別なく、前に序引あり、後には後引ありて、其事已に盡せりと雖も、覽者或は吾情に感する所あり、或は他人の請求に因り、詞を撰して以て末簡に書する者、總て之を題跋といふ

なり、其實を綜ぶるに、大畧四類に分つべし、其一を題とし、其二を跋とし、其三を書後とし、其四を讀とす、蓋し題は締なり、其義を審締するなり、跋は本なり、之に因て其本を見はすなり、書後は其語を書するなり、讀は其讀に因るなり、題と讀とは唐に始まり、跋と書とは宋に起る、今之を特に題跋といふは、其類を該舉するの稱なり、其詞は古を考へ、今を證し、疑を釋き謬を訂して、善を褒し、惡を貶し、法を立て、誡を垂るゝの類にして、各爲にする所あり、其專ら簡勁を以て主とする者にて、序引とは自ら異ならざるを得ざるものなり、又た題辭なるものあり、其本は漢の趙岐か孟子題辭に起因し、宋の朱熹に至り之に倣ふて小學題辭を作り、更に韻語を以て之を綴る、是亦題跋の一種とす、然れども題跋は後に書して、題辭は前に冠するが例なり、

文　凡そ簡を執りて辭を屬する者、文に非ざるはなし、而して此に獨り文といふものは、別に文と稱する文中の一躰あればなり、其格に散文あり、韻語ありて、或は楚辭に倣ひ、或は四六と爲し、或は以て神に盟ひ、或は以て人を諷する等、其躰各同からず、其用も亦異れり、韓愈の鱷魚文送窮文の如き以て見るべし、

箴　按するに說文に箴は鍼なりとあり、古へ夏商の二箴ありて、尙書大傳解及呂氏春秋等に見えたるも其句已に殘缺して、全文は見るに由なし、獨り周の太史辛甲か百官に命して王の闕を箴めたるの一なる虞人の一篇は、備に左傳に載たり、是に於て楊雄倣ふて之を爲しゝより、其後作者相繼て起り、以て自ら箴むるに至る、凡そ其躰に二樣あり、一は官箴とし一は私箴とす、大抵皆韻語を用ひて古今興衰理亂の機を反覆し、以て警戒を垂るゝ者なり、官箴とは漢の崔駰か大尉箴、漢の崔寔か諫大夫箴の如き者是なり、私箴とは唐の韓愈か游箴言箴行箴の如き者是なり、余尤も韓愈か三箴の簡明にして味ひあるを喜むか故に、左に錄して同好の士に示さんとす、

游箴

余少之時、將求多能、蚤夜以孜孜、余今之時、既飽而嬉、蚤夜以無爲、嗚呼余乎、其無知乎、君子之棄、而小人之歸乎、

言箴

不知言之人、烏可與言、知言之人、默焉而其意已傳、幕中之辯、人反以汝爲叛、臺中之

評、人反以汝爲傾、汝不懲邪、而咿嚘以害其生邪、

行箴

行與義乖、言與法違、後雖無害、汝可以悔、行也無邪、言也無頗、死而不死、汝悔而何、宜悔而休、汝惡曷瘳、宜休而悔、汝善安在、悔不可追、悔不可爲、思而斯得、汝則弗思

戒　戒も亦箴の類にして、警敕の辭なり、徐師曾云、既に箴ありて又戒あれは、則戒なる者は箴の別名歟と、以て其箴と一般なるを見るべし、淮南子に堯の戒を載て曰く、戰戰慄慄として、日に一日より讀む、人は山に躓くことなきも、而も垤に躓けりと、漢の杜篤に至り、遂に女戒を作りて、後世之に倣ふ事とはなりぬ、惜むらくは其文の傳はらざる事是なり、然れども唐に至り、儼然として一躰を爲し、其辭或は韵語を用ひ、或は散文を用ひ、分て二躰と爲す、柳宗元の三戒の如きは、全く散文躰を用ひし者なり、

銘　銘なる者は名なり、劉勰云、器を觀て名を正すなり、故に器を作りて偪く銘すれは以て大夫たるべしといへりと、今之を夏商周の三代に考るに、鼎彝尊卣盤匜の屬に至るまで、銘あらざるはなし、湯盤は已に大學に見え、大戴禮は備に武王の

諸銘を載せ、後人をして法を取る所あらしむ、是を以て其後作者寖く繁くして、凡そ山川宮室門井の類も皆銘詞ありて、徒に之を器物に施す而已ならざるなり、然れども其躰を要するに、大要は警戒と祝頌との二義に過ぎず、晉の陸機曰く、銘は博文にして温潤なるを貴ぶと、斯言之を得たり、此外又た碑銘墓碑銘墓誌銘等ありて、各一體を爲すに至れり

頌　按するに、詩に六義ありて其一を頌といふ、是れ頌なる者の由て起る所とす、蓋し頌とは盛德の形容を美して、其成功を神明に告るの辭なり、商の那周の清廟諸什の若きは、皆神に告くる者にして、乃ち頌の正躰なり、魯頌の駉閟等の篇に至りては、則以て僖公を頌するものにして、稍頌の變躰と爲す、然れども皆韻語を用ふるなり、後世の作者に至りては、或は散文を用ひ、或は韻語を用ひて、多くは其變躰に屬せり、韓愈が伯夷頌、元結が中興頌の若き、一は散文にして、一は韻語なり、以て古今の變を見るべし、劉勰云、頌の體たる、典雅清鑠揄揚汪洋として敷寫は賦に似たるも、而も華侈の區に入らず、敬愼は銘の如くなるも、而も規戒の域に異なりと、詳に斯言を味ひなば、以て頌を作るの大體を悟り得べし

贊　字書に贊は稱美也とあり、其字もと讚に作る、昔し漢の司馬相如始て荆軻を贊したるより、後人之を祖として、遂に一體を創するに至れり、而して其躰を細別すれば、大凡そ三種と爲すを得べし、其一を雜贊とし、專ら褒美を主とす、人物文章畫諸贊の若き是なり、其二を哀贊とし、人の沒するを哀み、德を述て以て之を贊する者是なり、其三を史贊とし、其詞は褒貶を兼ぬるを例とす、史記の索隱、東漢、晉書の諸贊の若き是なり、劉勰云、贊の體たる促にして曠からず、言を四字の句に結ひて、數韻の辭に盤植すと、此れ韻語を用ふるものにして、即ち贊の正體とす、史贊の若きは多く散文を用ひて、全く贊の變體に屬せり、

賦　賦はもと詩の一體にして、韻語を用ひ、直ちに其事を賦叙する者なり、然れども司馬相如か上林子虛の二賦は勿論、楊雄か甘泉賦、班固か兩都賦より、張衡か西京賦、東京賦、左思か三都賦の如き、歷代の作者多く力を此に用ひ、遂に文の一體となるに　れり、蕭統か文選に載る所を視ても、其盛んなりし事推して知るべし、我朝に在　ても、貞觀延喜の盛時の如き、苟も文章を講する者とさへいへば、皆賦を以て主腦とせざるはなし、所謂駢儷體なる者蓋亦賦より轉地し來るものに似た

り、賦の勢力實に想ひ見るべし、但し後世清の沈德潛か唐宋八家の文を選擇するに當り、賦を以て古詩の流と爲して、其選本に采入せざるは、頗る古義を存する者といふべきも、之を古今に通觀するときは、稍偏執に失するの憾なきと能はざるなり、然れども八家の學盛んなるより、賦體の文は遂に衰運に歸せり、

記　金石例に云、記なる者は事を記するの文なりと、禹貢顧命は乃ち記の祖にして、記の名は則ち戴記學記の諸篇に昉まり、厥の後ち揚雄か蜀記を作りし事あるも、文選に其類を列せず劉勰も其說を著はさゝれは、則ち漢魏以前にありては、作者尙少なくして其盛んなりしは唐より始まるなり、其文の主とする所は、專ら事實を記述するに在りて、後人の如く漫に議論を以てこれを行るものに非ず、然るに後人は其躰裁の如何を顧みずして、動もすれば輒ち議論を以て之に雜ふるもの少からず、而して其弊尤も蘇家の文に多しと爲す、故に陳師道いへる事あり、韓退之の記を作るは、其事を記するのみなるも、今の記は乃ち論なりと、蓋し亦此等の弊に感する者あり、しならん、然れとも退之か燕喜亭記を觀るに已に議論に涉れり、されば歐蘇以下の議論寖く多きは、怪むに足らざる者にして、其此に至るは、

勢ひのみ、記體の變、豈一朝一夕の故ならんや

傳　傳なる者は事跡を紀載して後世に傳ふるを以て主眼とす、故に之を傳といふなり、漢の司馬遷が史記を作て列傳を創爲し、以て一人の始結を紀してより已來、後世の史家たる者皆其例を襲用し、卒に易ふ可らざるの文體とはなりぬ、それ既に後世に傳ふるを以て主眼とする者なれば、命意用筆並に苟且にすべからざるは勿論の事にて、清の顧亭林は古人は人の爲に傳を立てずといふに至れり、其意に據るに、傳を立つるは史官の職にして、後世の爲に鑑戒を垂るゝ者なれば、一私人の爲にして作爲すべき者に非ずと、且其說に云、列傳の名は太史公に始りて史を作るの職に當る者に非れば人の爲に傳を立つべからず、故に碑あり誌あり狀ありても傳はなし、梁の任昉が文章緣起に、傳は東方朔か非有先生の傳を作りしに始まるといふも、是は寓言たるを以て傳とは謂ふなり、韓文公の集中に太學生何蕃坊者王承福毛穎の三傳あり柳子厚の集中にも宗清郭橐駝童區寄梓人李赤螊蝂の六傳あるも、何蕃は僅に其一事を採りてこれを傳と謂ひ、王承福の輩は皆微者にして而も之を傳と謂ひ、毛穎李赤螊蝂は戲れのみ而も之を傳と謂へは、

蓋し稗官の屬に比するのみ、段太尉の若きは則ち傳といはずして逸事狀といふ、子厚の敢て段太尉を傳せざるは、史任に當らざるを以てなり、宋より以後は乃ち人の爲に傳を立つる者あり、史官の職を侵せりと、又太平御覽書目に古人別傳數十種を列し、之を別傳と謂ふ、史家に別つ所以なりとあり、此れ傳の正體別體を示したる者にして、其他尙ほ家傳紀事等の類あるも、皆傳の別體と知るべきなり、

墓碑　古へは葬に豐碑あり木を以て之を作り、槨の前後に樹て、其中を穿て鹿盧と爲し、絆を貫して以て窆せり、檀弓に公室視豐碑とあるは是のみ、漢より以來、始めて死者の功業を其上に刻し、稍改めて石を用ふるに至れり、之を墓碑といふ、又墓碣ともいふ、葬時に於て其人の世系名字爵里行爲壽年卒葬日月と、其子孫の大略とを石に勒して以て墓側に埋め、異時陵谷變遷の防と爲す者、これを誌銘と謂ふ誌は記なり銘は名なり、其人の道德功業を千萬世に銘すべき者をば銘といふなり、其誌あり銘ある者を墓誌銘といひ、其誌ありて銘なく、或は銘ありて誌無き者は別體とす、墓誌といへは誌有りて銘なく、墓銘といへば銘ありて誌なきが通例なるも或は單に誌といひて却て銘あり、單に銘といひて却て誌あり、又は誌と

いひて却て是れ銘、銘といひて却て是れ誌なる者あり、此皆變體とす、其未だ葬らずして櫬に厝する者を殯誌と曰ひ、後に葬りて再ひ誌す者を續誌と曰ひ、又は後銘と曰ひ、他所に歿して歸り葬る者を歸祔誌と曰ひ、他所に葬りて後に遷す者を遷祔誌と曰ひ、蓋に刻する者を蓋石文と曰ひ、磚に刻する者を基磚記と曰ひ、墓銘と曰ひ、木版に書する者を墳版文と曰ひ、墓版文と曰ひ、又葬誌と曰ひ誌文と曰ひ、墳記と曰ひ、壙誌と曰ひ、壙銘と曰ひ、槨銘と曰ひ、埋銘と曰ふあり、其文たるや正變二體あり正體は唯事實を敘し變體は稍議論を加ふ、或は敘論夾寫なるもあり、若し夫れ銘の體たるや三言四言七言雜言散文等ありて、其韻を用ふるも、一句に韻を用ふるあり、兩句に韻を用ふるあり、三句に韻を用ふるあり、前に韻を用ひて末に韻なく、前に韻なくして末に韻を用ふる等あり、或は全く韻を用ひざるもあり、然れども隔句に韻を用ふるを通例とす

墓表　墓表は東漢の時より始まる、東漢の安帝元初元年に謁者景君墓表を立てしより以來、後世卒に一體を成すに至れり、其文體碑碣に同きも但銘辭なきを以て異なれりとす、且碑碣の文は等級制限ありて五品以上の官には碑といひ、五品

以下の官には碣といふが古例なるも、墓表に至りては官の有無等級等に拘らず、皆之を用ふるを得べし、其神道に樹つる者あるを以て、故に又神道表と稱す、神道碑も同前なり、或はまた阡表殯表靈表と稱する者あり、阡は墓道なり、殯はまた葬らざるの稱なり、靈は始めて死するの稱なりされば靈よりして殯、殯よりして墓墓よりして阡とす、並に墓表の別體なり、歐陽永叔の瀧岡阡表の若きは有名の文にして最も參考するに足れり、

行狀　劉勰云、狀は貌なり、禮貌の本原は其事實を取る、先賢の表謚並に行狀あるは、狀の大なる者なり、漢の丞相倉曹の傳に、朝鮮始めて楊元伯の行狀を作りしより後世卒に之に因れりと、蓋し死者の世系名字爵里行爲壽年の詳細なる事を具狀し、或はこれを官に上りて編錄を請ひ或はこれを作者に託して墓誌碑表の類を乞ふに用ふ、顧亭林云、誌狀は文章家に在りては史の流たり、之を史官に上し、之を後人に傳へて、史の本と爲す、史は以て事を記し、亦以て言を載す、故に其人一生著す所の文を讀まざれば、以て作るべからず、其人にして公卿大臣の位に在りしならば、一朝の大事を悉さゝれば、以て作るべからず、其人にして曹署の位に在りしならば、一朝の掌故を悉さゝれば、以て作るべからず、其人にして監司守令の位にありしならば、一方の地形土俗因革利病を悉さゝれば、以て作るべからず、今の人未だ此に通ぜずして、漫に人の爲に誌を作り、史家また考へずして之を承用す、是を以て牴牾して合はずとなり、以て其誌狀を作るの難きを見るべし、或は題して逸事狀といふ者あり、所謂柳子厚が段太尉逸事狀の如き是のみ、蓋し其人の逸事を收錄する者にして乃ち行狀の別體なり、

祭文　祭文は誄辭にして、死者を祭奠するの辭なり、古への祭祀は告饗に止るも、中世より以還は、兼て其言行を讃して、哀傷の意を寓するに至る、是れ祭文の由て起る所なり其辭たるや、散文あり韻語あり、儷語ありて韻語の中、又四言六言雜言騷體儷體の同からざるあり、劉勰云、祭奠の文は宜く恭ふして且つ哀かるべし、若夫れ辭華にして實なく、情鬱して宣びざるは皆其工なるものに非るなりと、又以て其用力のある所如何を詳にするを得べし、此他祝文吊文の類あるも、並に祭文と大同小異なれば、此に畧すべし、

哀辭　哀辭も亦祭文の一體なり、但し祭文は韻文あり散文ありて、其體一例に非

るも、哀辭に至りては全く韻語を用ひざるべからず、且哀辭には大抵序引ありて事實の梗概を敍し、然る後に韻語を用て悲哀の情を述ぶるものとす、尤も哀辭に限らず、凡て辭といふときは、韻語を用ふるを以て正體とせり、

已上擧げたる所は漢文の體裁上、古來より實例證を略示したる者に過ぎず、其詳細なる點に至りては容易に盡すへきに非れば、尙當に他日を期して論述する所あるべし、然れども漢文の體裁如何といふに至りては、是れまで述べたる所にて、其一斑は知了するに餘りあらんこれよりは次第を逐ふて當に文章の作法に就て、其得失のある所を略述すべし、

文章の作法

凡そ文章の作法に於ては古より今に至るまで千差萬別にして、人々其意見を異にする所なるも、既に文章軌範八家文讀本等の流行もある今日なれば、大概の事は諸君自ら知了せらるる所なるべし、去ながら文法といふ者は、規則あるが如くにして規則なく、規則なきが如くにして規則あり、變化無窮の業なれば、杓子定規に其一端を取りて臆斷すべきものにあらず、因て先つ古人の文法を論ずる中に就て、其尤も

參考するに足るべきものと信ずる所の說を歷擧して斯文に篤志なる者の爲に、其注意を促す事とせん、

宋の呂東萊が看文法を論して云文を學ぶには、須らく韓柳歐蘇の集を熟看し、先つ文學の體式を見て、然る後に徧く古人の意を用ひ句を下す處を攷ふべし、第一に大槩の主張を看るべし、第二に文勢の規模を看るべし、第三に綱目の關鍵を看るべし、關鍵とは、如何ぞ是れ主意にして首尾相應する、如何ぞ是れ一篇の鋪敍次第なる、如何ぞ是れ抑揚開合の處なる第四に警策句法を看るべし如何ぞ是れ一篇の警策なる如何ぞ是れ句を下し字を下して力有るの處如何ぞ是れ起頭換頭の佳處なる、如何ぞ是れ緻結の力ある處なる、如何ぞ是れ融化屈折して、剪截の力ある處なる、如何ぞ是れ實體の題目に點する處なると、又韓柳歐蘇の文を評して云、韓文は簡古にして、一に經に本づき亦孟子を學べり、韓の簡古を學ぶには他の法度を學ばざる可らず、徒に簡古にして法度に乏しければ、朴にして文ならず柳文の關鍵は國語より出づ當に他の好處を學ぶべし、當に他の雄辯を戒むべし、議論文字も亦反覆すべし、歐文は平淡にして韓子を祖述せり議論文字最も反覆すべし、歐の平淡を學ぶには他

の淵源を學ばざる可らず、徒に平淡にして淵源なければ委靡して振はず蘇文は波瀾あり其波瀾は戰國策史記より出づ亦關鍵法を得たり、當に他の好處を學ふべし當に他の純ならざる處を戒むべしと、此れ徒に看文法若くは文評のみならず、作文の法に於ても、思ひ過半なるべし、又其作文法を論するにいふ、文字一篇の中、須らく數行齊整の處あるべし、須らく數行齊整ならざる處あるべし、或は緩に或は急に、或は顯に或は晦にして、緩急顯晦相間し、人をして其緩急顯晦たるを知らざらしめ、常に經緯相通して、一脉の其間に過接するとあらしむべし、蓋し形ある者は綱目にして形なき者は血脉なり、文字の有用とは議論文字是なり、文を爲すの妙は、事を敘し情を狀するに在り、筆健にして而も塵ならず、意深ふして而も晦ならず、句は新にして而も怪ならず、語は新にして而も狂ならず、常の中に變あり、正の中に奇あり、題にして常なれば意は新に意にして常なれば語は新にすべし、辭源浩渺として而も之を冗に失せず、意思新に轉處多ければ即ち緩ならず、前を結び後を生し、曲折斡旋して轉換に力有り、反覆操縱なるべしと、又文病を論して云、

深晦怪冗弱澁虛直疎碎緩暗塵俗熟爛輕易

排事說不透意未盡泛而不切

以上の十九病を列擧せり、其内に就て晦といひ、怪といひ、冗といひ、弱といひ、澁といふの類は、既に其字面を見れば、一目して文章の病たる事明瞭なるも、第一に掲たる深といふに至りては、頗る考量を費すべき者あるに似たり、何となれば、深の字は淺の對にて、凡そ文章を作るに當り、意味の淺近なるは嫌ふべき事なるも、深遠なる文に至りては、最も歎賞すべき者なればなり、然るに今其深きを以て病とするは、何故なるやといふに、こは大に道理のある事なり、固より文章は深遠なるを好むと雖も、文士の病として、動もすれば艱深險怪の文を以て深遠なりと誤認し、世人の通曉し易からざるを以て得意とする者あり、かの韓退之か陳商に答ふる書に、語高旨小三四讀尚不能通曉茫然增愧赧といへるが如く、韓退之の大學者を以てすら尚通曉すると能はずとあれば、これ殆んと世の中に讀み得る人のなきほどの文を作れる者といふべし、勿論韓退之の言ふ所は側面より觀察したるの冷語にして、實際に通曉せざるには非るも、餘り陳商か奇癖に趨りしかば、其弊を矯めんとて、斯くは冷語を下したる者ならん、これ所謂艱深の病にして、即ち深といふの流弊なり、故に東坡

も揚雄の文を斥けて、務爲艱深不測之量、以飾淺近之意、などと評するに至れり、されば文章の深遠なるを貴ぶと共に、平正にして明確なるを先務とし、艱深にして險怪讀み難きをば、最も避くべきの事と知るべし、然るに人の奇を好み怪を喜ぶや、自然と艱深に陷り易きの弊あれば、其文病を列擧するに當りても、第一に深の字を掲けて之を戒めたる所以なるべし、

さて作文の得失を示したる者にて、最も後學に便なる者は、明の歸震川の文章指南是なり、勿論右の指南は、震川の自撰に非るべしとの疑難もあれど、苟も後學に益ある以上は、震川の自撰と否ざるとは辨ずるに及ばざるべし、所謂指南は作文の法を六十六則に分ち、これが參考となるべきの文百十八篇を錄したり、然れども其全文を辨ずるは、僅々の時間中に做し得べきの事に非ず、且倦厭を來すの恐れもあれば、爰に先つ六十六則中に就て主要なるものゝ大要を掲け、尙吾所見に係る者を附言して、更に其說を講明すべし、其目左の如し、

通用義理則第一　通用義氣則第二　通用才識則第三　關世敎則第四　占地步則第五　立論正大則第六　用意奇巧則第七　造文平淡則第八　造語著勁則第九　敍事典贍則第十　詞氣委婉則第十一　神思飄逸則第十二　譬喻則第十三　引證則第十四　將無作有則第十五　化用經傳則第十六　引事論事則第十七　抑揚則第十八　尙論成敗則第十九　一反一正則第二十　正反襯應則第廿一　前後相應則第廿二　總提分應則第廿三　總提總收則第廿四　逐事條陳則第廿五　文勢層疊則第廿六　句法長短錯綜則第廿七　一級高一級則第廿八　一步進一步則第廿九　文勢如貫珠則第三十　文勢如走珠則第三十一　文勢如擊蛇則第三十二　文勢如破竹則第三十三　先虛後實則第三十四　先疑後決則第三十五　下句戴上句則第三十六　綴上生下則第三十七　疊上捲下則第三十八　捆截上文則第三十九　設爲問難則第四十　合意不露則第四十一　設爲問答則第四十二　辨史則第四十三　文短氣長則第四十四　字少意多則第四十五　字繁不厭則第四十六　雙關則第四十七　兩柱遞文則第四十八　下字影伏則第四十九　相題用字則第五十　題外生意則第五十一　駁難本題則第五十二　廻護題意則第五十三　徑空立意則第五十四　死中求活則第五十五　立意貫說則第五十六　綴應前語則第五十七　疊用綴語則第五十八　結意有餘則第五十九

竿頭進歩則第六十　結束拾應則第六十一　結束推原則第六十二　結束推廣則第六十三　結束垂戒則第六十四　結束有力則第六十五　結束斷制則第六十六

第一通用義理則

文章は理を以て主と爲す、理得て辭順なれば、文章自然に辭を出て華を拔かん、程伊川の周易傳序、王陽明の博約說の如きは、此れ皆義理の文にして、聖道の微を卓見せり、

王臨川曰く、嘗て思ふ近世の文、辭は理を顧みず、理は事を顧みず、故實を襞積するを以て學ありと爲し、語句を雕繪するを以て精新と爲す、これを奇花の英を擷り積て之を玩ふに譬ふ、光華馨采は辭縟愛すべしと雖も、其根柢の濟用を求むれば蔑如なりと、是れ當時の文弊を論ずる者にして、亦以て前說を發するに足れり、

張宛丘曰く、六經より以下、諸子百氏騷人辨士の論述に至るまで、大抵皆將に以て理を寓するの具と爲さんとするなり、是故に理勝る者は、文に工を期せずして工なるも、理悖る者は、巧に粉澤を爲しても、隙間百出す、此れ猶兩人牒を持して訟ふるに、直者は筆を操り累々を待たずして、之を讀むと破竹の如く、橫斜反覆自ら節目に中り、曲者は詞を子貢に假り、字を楊雄に問はしむと雖も、五味を列して調和する能はざるが如く、之を口に食するに、一として愜ふべき無し、何ぞ況や人をして之を玩味せしむるをや、故に文を學ぶの端は、理を明にするを急とす、又曰く、六經の文は、易より奇なるは莫く、春秋より簡なるは莫し、夫れ豈奇と簡とを以て務めと爲さんや、勢ひ自然のみ、傳に曰く、吉人の辭寡しと、彼れ豈繁を惡みて寡を好まんや、繁を爲さんと欲すと雖も得可らざるなり、唐より以來今に至るまで、文人の奇を好む者一にあらず、甚しき者は、或は缺句斷章を爲して、脉理をして屬せざらしめ、又古書訓詁の見聞に希なる者を取りて、衣被して之を說合し、或は其字を得て其句を得ず、或は其句を得て其意を知らず、反覆咀嚼するに、卒に亦有ると無し、此れ最も文の陋なりと、又曰く、辭は理に生し、理は心に根す、苟も邪氣の心に入らず、僻學の耳目に記せざるときは、中和正大の氣中に溢れ、文字言語に發し、未た嘗て明白條暢ならずんばあらずと、

呂東萊曰く、世儒の文、辭愈多くして理愈亂る、蓋し書は五事あるも、序言の理に中る者無しと、此れ義理を講ぜざるの弊なり、

杜靜臺曰く、理なる者は文の根なり、辭なる者は文の華なり、然らば則ち其辭を信

ゆんと求むる者は、其理を達せんとを求むるのみ、又曰く、理中に積みて言自ら沛然として餘り有り、辭富を以て工となさずと雖も、未た嘗て富まずんはあらざるなり、理中に精にして言自ら斐然として章あり、辭麗を以て工と爲さずと雖も、未た嘗て麗ならずんはあらざるなり、又曰く、理の體認既に眞なれば、其身は千載の下に生ると雖も、其心は明良聖賢一堂の上に遊ふが如し、其言は五經四書の中に載ると雖も、其理は吾身心目の間に在るが如し、未た筆を下し文を爲して其格局辭氣の善を求めずと雖も、然れども理定りて格自ら定り、理足りて辭自ら足り、理順にして氣自ら順なればなり、必ずしも苦思力索せずして、天下の至文は此に於てか出ん、

袁了凡曰く、文に詞あり理ありて、理は之が主たり、故に理明なれば詞顯なり、理密なれば詞精なり、理當れば詞確なり、理は譬へば主人なり、詞は譬へば奴僕なり、未た主人精明にして奴僕令に從はざる者あらず、人惟理を窮むるを知らずして、徒らに工を詞氣の間に求む、故に苦心を用ひ盡しても終に人の頭地をいづることと能はざるなり、

武叔卿曰く、陸士衡云、理は質を扶けて幹を立つと、文の理あるは文の立つ所以なり、天地の間、物として理なきは無し、木石は蠢然たる者なるも、中亦各種あり、木に理なければ、枝幹以て植すると無し、石に理なければ、脉絡以て分つと無し、文字に理無れば、格何を以てか立ち、詞何を以てか行んや、吾れ謂ふ文の理あるは、猶人の心あるが如し、人惟心有り、始めて以て衆形を役使するに足れり、然らざれば渙散して統無し、文惟理有り、始めて以て詞格を主張するに足れり、然らざれば枝蔓にして當ると無し、故に理の文章を貫するは、猶心の氣體を帥ゆるが如し、一定して離る可らざる者なり、

方望溪曰く、今の人も亦理の宗とする所あるを知れり、乃ち先儒の陳言を雜述して闢く所無きなり、亦辭の古を尙ふを知れり、乃ち古人の形貌を規摹して其眞に非るなり、理は正にして皆心に得、辭は古にして必ず己れに出づ、是の二者を兼ぬるは、昔人の難しとする所にして、今の當に力を盡べき所なり、

第二通用養氣則

文を爲るは必ず氣を養ふに在り、氣は中に充て、文は外に溢る、蓋し然るを期せずして然る者あり、諸葛孔明の前出師表、胡澹菴の上高宗封事の

如きは、皆沛然として肺腑中より流出し、文を期せずして自ら文なり、正氣の發する所に非ずと謂はんや云々、

韓昌黎曰く、氣は水なり、言は浮物なり、水大にして物の浮ふ者大小畢く浮べり、氣の言とは猶是の如し、氣盛んなれば、言の短長と聲の高下なる者と皆宜し、

杜樊川曰く、文は氣を以て主と爲す、氣の和するときは、文自ら雍容大雅なり、氣の壯なるときは、文自ら克實雄健なり、氣の清なるときは、文自ら澄潔鮮明なり、凡そ文を作らんと欲せば、須く先づ氣を養ふべし、輕喜する毋れ、氣の揚を懼るゝなり、暴怒する毋れ、氣の拂を懼るゝなり、多言する毋れ、氣の躁を懼るゝなり、妄動する毋れ、氣の失を懼るゝなり、動靜語默も端詳閒泰にして常に太和の元氣をして、四體の間に周流せしめば、發して文章と爲るも、自然に尋常に迥出せん、

李文饒曰く、魏文典論に稱すらく、文は氣を以て主と爲す、氣の清濁に體ありと、斯言之を盡せり、然れども氣は以て貫せざる可らず、貫せざれは英辭麗藻有りと雖も、編珠綴玉の如くにして、金璞の寶たるを得ず、氣を鼓するに勢を以てし、壯なるを美と爲す、勢は以て息せざる可らす、息せざれは流蕩して返るを忘れん亦猶絲

の繁奏に、必ず希聲窈眇として、之を聽く者悅ひ聞か如く、川流の迅激に、必ず洄洑逶迤として、之を見る者厭はざるが如きなり、

蘇潁濱曰く、文なる者は氣の形する所なり、然れども文は學を以て能くす可らず、氣は養を以て致すべし、孟子曰く、我れ善く吾が浩然の氣を養ふと、今其文章を觀るに、寬厚宏博にして、天地の間に充ち、其氣の小大に稱へり、太史公は天下を行き四海名山大川を周覽し、燕趙間の豪俊と交游す、故に其文疎蕩にして、頗る奇氣あり、此二子なる者、豈嘗て筆を執り此の如きの文を爲すを學ばんや、其氣其中に充ちて其貌に溢れ、其言に動きて其文に見はれ、自ら知らざるなりと、袁中郎其說を敷衍して曰く、潁濱の文は氣の形する所といふ、議論、極めて是なり、嘗て觀るに漢高の大風一歌氣魄世を蓋ひ、兩漢詞人の冠たり、項羽垓下の作談者いふ一字一淚人をして悽絕ならしむと、二公豈嘗て筆を操りて文を爲すを學ばんや、一は得意の極に處し、一は失意の極に處す、皆氣の中に充ち文に見はれて、自ら知らざるのみと、是も亦味ひあるの言なり、

王梅溪曰く、文は氣を以て主と爲す、天下の剛者に非れば之を能くすると莫し、古

今能文の士多からざるに非ず、而して能く傑然として自ら世に名する者は幾ばくも亡きなり、文の足らざるに非ず、剛氣の之が主となると無きなり、孟子は浩然天地に充塞するの氣を以て、發して七篇仁義の言と爲り、韓子は忠逆鱗を犯し、勇三軍を叱するの氣を以て、發して日光玉潔六經に表裏するの文と爲る、故に孟子が楊墨を闢くの功禹の下に在らず、而も韓子が異端を觝排し佛老を攘斥するの功、また孟子の下にあらじ、皆氣の然らしむる也と、異端排斥の論、稍青紫を失すと雖も、其氣の貴ぶべきを論ずるに至りては、頗る參考に資する者あるなり、

葛屺瞻曰く、氣なる者は人の一身に貫し、四肢百體皆藉して運動せり、手足の一處氣到らされば其手足痿痺し、膚肉の一點氣到らざれば其膚肉潰爛すべし、咽喉の處に至りては、一線接せざれば百骸俱に僵れて死せんのみ、文も一字貫せざれば死字と爲り、一句貫せざれば死句と爲り、一段貫せざれば死句と爲り、關鍵緊要の處に至りて一絲の貫せざるとあれば、通篇の文字皆死せんのみ、縱ひ擒詞は華藻ならしむるも、木偶人に對するが如きに過ぎざるのみ、豈能く人の心目を動かさんや然れども氣もまたこれ一直徑に到底斷續あると無く、曲折あると無き者に

非るなり、其間自ら開闔あり、譬へば人の鼻息に必す一呼一吸ありて、迭に相循環するが如し、若し只吸して呼せず、或は止た呼して吸せざれば、半晌をも下らずして、氣は必す悶絕せん、文氣も亦然り、必ず其一開一闔をして呼吸常に通し、一身の氣の如く周流旋轉して、百骸四肢に融洽して痿痺潰爛するを無らしむるは、是れ乃ち氣の說なり云云、

武叔卿曰く、作文の養氣に於ける、根を深くし蒂を固ふするの道なり、然れども氣は體の充るものなれば、藏を欲し固を欲せり、惟藏且固なるときは、氣實して體充ち、天下の事何の重きか勝ゆ可らざる、何の遠きか到る可らざらん、況や文字をや、若し氣餒て充たざるときは、體弱にして志隳ち、困頓顛踣して至らざる所なけん、試に看よ、委靡なる者は其氣昏弱なり、浮華なる者は其氣佚蕩なり、輕薄なる者は其氣躁動なり、鹵莽なる者は其氣粗豪なり、發洩すると此の如く、渙散すると此の如し、均しくこれ颺颺附體せざるなり、安んぞ其れ精を聚め神を會して、文字に工なるを望まんや、根深からざれば葉茂からず、これ必然の理なり、又曰く、胸中もと盛大磅礴の氣あり、但し耳目の未だ廣からざるに束し聞見の未だ博からざるに

馬す、故に踊躍雄飛として、氣遂にこれに固りて以て餒るのみ、若し長遊遠歸して、見聞する所に隨ひ、これを收めて以て吾懷を壯にせば、其氣當に自ら超然たるものあるへし、今壯遊すると能はすと雖も、また須く其胸襟を廣大にし、其志意を恢廓にすべし、即ち四時の代謝、風雷の變化、日月星辰の燦爛、山川草木の敷布の如き、凡そ天地間の形々色々生々化々に至るまで、これを取りて以て吾が助と爲す可らざる者無きなり、若し能く隨處に觀覽し、油然として心目に會悟せば胸中亦自ら觸發する者あらん、これ養氣の一道なりと、

姚姬傳曰く、文字ある者は猶人の言語の如きなり、氣以てこれに充つる如あれば、其文を觀るや、百世の後といへども、其人を立てゝ與にこゝに言ふが如し、氣なければ存を積むのみと、是亦能く文字を形容する者と謂ふへし、

以上は唐宋明清諸家の論する所に就きて、其一斑を示したるものなり、本邦の先輩頼山陽の如き、長野豊山の如き、齋藤拙堂の如き、其の說くところ、彼此相發するに足る者あり、因て左に引て其說を廣むべし、

頼山陽曰く、文は氣を以て主と爲す、其人と爲り氣あるときは、文甚た工ならずと

雖も觀すべし、苟も氣なければ、工なりと雖も觀るに足らず、相如楊雄の如き是のみ昌黎の貴ぶべきは氣に在り、文の工なるはこれを以てなりと、

長野豊山曰く、文章は必ず須らく一氣に呵成すべし、譬へば猶人の一身の如し、四支百骸各其用を異にするも、氣の全體に流貫する者は、未だ嘗て中絶せずして、乃ち能く生活運動するなり、若し徒に頭目手足ありて、一氣の流通すると無ければ、是れ木偶なるのみ、文に抑揚、開闔操縱、起伏、回抱、接、初種々の法あるも、一氣に呵成して、乃ち能く作手と稱すべし、もし徒に句を拾ひ字を綴り、銖積寸累して、慘澹經營せば、無數斷續の痕ありて、言語を成さんやとなり、

齋藤拙堂曰く、人能く卓然として其中に立つ所ありて、而後に氣は充溢す、氣充溢して而後に言語文字磨滅すべからず、夫れ氣なる者は、方寸の中に蓄へ、天地の間に塞かり、而して千万歳の下に著はる、然れども其跡を驗せんと欲せば、必ず言語文字を借らざる可らす、言語文字を借り、而後に之を見るを得べし、言語文字赫然として、千万歳に涉りて蝕せざるは、必ず其浩然傑然たるの氣あるを以てなり、故に言語文字は末なり、氣は之が本たり、但し氣の浩然傑然たる所以の者は、又其能

く卓然其中に立つ所あるを以てなるのみ、又云、氣の振ふ者は、文求めずして至る、唯氣は忠義より振ふは莫し、故に劉蕡の對策、胡銓の封事の如きは、皆人目を刮するに足れり、二子の文才、固より韓歐の後塵を望まず、而るに二篇の文萬世に磨せざる者は、豈に忠義の氣の然らしむるに非ずやと、是も亦一說と謂ふべし、

第三通用才識則

文章は識に非れば以て其本を厚ふするに足らず、才に非れば以て其用を利するに足らず、才識俱に備はりて、文字自ら人に高し、司馬子長が太史公自序の如き、史記の大意を發する所以なるも、其辯駁の才、淹貫の識、盡くこゝにあらはれたり、

唐荆川曰く、文章家の繩墨布置奇正轉折は、自ら專門の師法あるも、中間一段の精神、命脉、骨髓に至りては、心源を洗滌し、物表に獨立して、今古の後眼を具する者に非れば、以て此に與るに足らず、今兩人あり、其一人は心地超然所謂千古の後眼を具する人也、即ち未だ嘗て紙筆を執り、呻吟して文章を爲すを學ばず、但直ちに胸臆に據り、手に信せて寫出し、家書を寫すが如くならしむ、或は疎鹵なりと雖も、然れども絕て煙火酸餡の習氣なく、便ち是れ宇宙間第一樣絕好の文字なり、其一人

は猶然塵中の人也、其れ頡々として文章を爲すを學び、其所謂繩墨布置に於ては、盡く是なりと雖も、然れども翻來覆去、是幾句婆子舌頭の話に過ぎず、其所謂眞精神と千古磨滅す可らざるの見とを索むれば、絕て有ると無きなり、則ち文は工なりと雖も、下格たるを免かれず、これ文章の本色なり、即ち詩を以て喩と爲さんに陶彭澤未だ嘗て聲律を較し句文を雕せず、但手に信せて寫出したるも、便ち是れ宇宙間第一樣の好詩なり、何となれば其本色高ければなり、詩有りてより以來、其聲病を較し句文を雕し、心を用ふること最も苦み、而して說を立つること最も嚴なる者は、沈約に如くはなし、若し一生の精力を却け、人をして其詩を讀ましめば、祇其細縟齷齪として、滿卷累牘、竟に嘗て一兩句の好話を道ひ出でず、何となれば本色卑ければなり、本色卑ければ文工なると能はざるなり、而るを況んや其本色に非るものをや、且夫れ兩漢よりこのかた、文の古に如かざる者は、豈其れ所謂繩墨轉折の精の盡く如かざるものならんや、秦漢より以前は儒家は儒家の本色あり、老莊家の如きは老莊家の本色あり、横縱家は横縱家の本色あり、名家、墨家、陰陽家はまた皆其本色あり、其術たるや駁なりと雖も、みな一段千古磨滅す可らざるの見

あらざるは莫し、是を以て老家は必ず肯て儒家の說を勦せず、縱橫家は必ず肯て墨家の談を借らず、各自ら其本色ありて、而して之を鳴らして言を爲す、其言ふ所の者は其本色なる也、是を以て精光注きて、其言遂に世に泯びず、唐宋より下の文人は性命を語り治道を談し、滿紙炫然として一切自ら儒家に託せざるは莫し、然れども其涵養畜聚の業にあらず、眞に一段千古磨滅す可らざるの見あるに非ずして、影響剽說のみ、頭を蓋ひ尾を竊み、貧人か富人の衣を借り、莊農か大賈の飾を作し、力を極めて裝ひ做すが如し、醜態盡く露はる、是を以て精光樣して、其言遂に久しからずして澌磨す、然れば秦漢よりして上は其老墨名法雜家の說と雖も猶傳はるべし、今にある諸子の書是なり、唐宋よりして、下は其一切性命を語り治道を談ずるの說と雖も、亦絕た傳はらざるべし、歐陽永叔が見る所の唐四庫書目も、百に一をも存せざる者は是なり、後の文人として立言を以て不朽の計を爲さんと欲する者は以て心を用ふる所を知るべしとなり、

劉兩河曰く、文章家の要路關鎖は惟一識のみ、天下の事豈能く件々曉り得ん、天下の書豈能く本々讀むことを得ん、一步の識を進むれば、一分の理路を看ることを得ん、

一分の理を看ることを得ば、後一步の識を長するなり、

武叔卿曰く、文家の議論皆識見中より來る、識見高ければ議論も亦高く識見卑ければ議論も亦卑し、古人の三長を論して、必ず才學識といふ所以なり、識の著作に關すること最も要なるを以てなり、試に看よ、古來の文學、奇正醇疵同からずと雖も、大要皆一段人に過るの識見あり、傳へて今に至るも不朽なる所以なり、然らずんば即ち詞を搦することを春華の若くなるも、亦時と俱に沒せん耳、

吳無障曰く、文新ならずして新に、奇ならずして奇に、高曠ならずして高曠なる者あり、他無し、議論卓然として精神發越するのみ、それ其辭を荊棘にすると其意を模糊にすることの二つの者は、皆文の禁する所なり、文章に十分の開見を增すは、一分の識を增すに如かず、識愈高ければ文愈濬なり、識愈卑ければ伎倆愈多し、伎倆愈多きに至りては、品愈下る、內足らず、故に外餘りあり、此れ理の自然にして、怪むに足る者無し、夫れ戶には必ず樞あり、船には必ず柂あり、文には必ず一段の最緊關の處あり、惟平日に善く書を看るときは識進む、識進むときは此最緊關の處に據り、牽繼して定むることを得ん、時に臨み手に信せ拈し來れば、頭々是れ道なり、容

を整へ標を敘めて語るも亦可なり、嘻笑怒罵して語るも亦可なり、雄猛なると鉅麗一戰の如きも亦可なり、閒暇なると棋を圍み壁を賭するが如きも亦可なり簡峻なると片言折獄の如きも亦可なり、忽ち九天に入り忽ち九地に潛むも亦可なり、横行直撞逕箇の區々を離れず、左顧右眄之を用ふる所なし、故にそれ修詞の擾なく、敷衍補綴の勞なく、一切の煩苛を省除して、これを至易至簡なる者に歸するは、譬に如くはなし、識の文に於けるや、一綱舉りて萬目張る、の道なり、其脂粉を嗅落する者三年にして一葉を成する說なり、操觚者奈何ぞ一丁百當を務めずして、顧て屑々焉と其爲す所力を用ふる多くして功を成すと寡きに趨くや、故に術は愼まざる可らざるなり、

魏東房曰く、文章は首に識を貴ひ次に議論を貴ふ、然れども識あれば議論自ら生じ、議論あれば詞章自ら已む能はず、何となれば、人一見を得れば必ず其說を伸べん、これを發して未だ鬱びざれば、說必ず止むを得ざるなり、夫れ怨怒寃抑の意中に積むときは、慷慨激烈の言沛然として禦くと莫し、文を作りて詞の足らざるを憂ふるは、胥無識の病なるのみと、知言といふべし、

第四 關世教則

文章は世教に關するに足らざれば、工と雖も益なき也、李泰伯の袁州學記の如き、臣子の分を議論すると懇惻切至にして、讀者輒ち忠孝の心を起せり、文の世教に關する者に非ずといはんや、王陽明の象祠記も頗る人を感發する處あり、以て參看すべしとなり、

柳柳州曰く、吾れ文章をつくる毎に、未だ嘗て敢て輕心を以て之を掉はず、其剽して留まらざるを懼るゝなり、未だ嘗て敢て怠心を以て之を易せず、其弛びて嚴ならざるを懼るゝなり、未だ嘗て昏氣を以て之を出さず、其昧沒して雜なるを懼るなり、未だ嘗て敢て矜氣を以て之を作らず、其偃蹇して驕れるを懼るゝなり、之を抑へては其奥ならんとを欲し、之を揚げては其明ならんとを欲し、之を疏しては其通せんとを欲し、之を廉しては其節ならんとを欲し、激して之を發しては其清からんとを欲し、固して之を存しては其重からんとを欲す、これ吾が夫の道に羽翼する所以なり、之を書に本けて以て其質を求め、之を詩に本けて以て其恒を求め、之を禮に本けて以て其宜きを求め、之を春秋に本けて以て其斷を求め、之を易に本けて以て其動を求む、此れ吾が道の原を取る所以なり、之を穀梁氏に參し

て以て其氣を厲し、之を孟荀に參して以て其支を暢べ、之を莊老に參して以て其端を肆にし、之を國語に參して以て其趣を博し、之を離騷に參して以て其幽を致し、之を太史に參して以て其潔を著はす、之れ吾が旁推交通して以て之が文をつくる所以なり、

程伊川曰く聖賢の言は已むを得ざるなり、彼の未粗陶冶の器の如し、一つ制せざるときは、生人の道足らざるとあり、然れども天下の理を舉るとは、また甚だ約なり、後の人始めて卷を執れば、則ち文章を以て先と爲す、生平のつくる所動もすれば聖人よりも多し、然れどもこれわるも補ふ所なく、これなきも闕る所なし、乃ち無用の贅言なりと、稍酷論に失すと雖も、其理は即ち然るなり、

丘瓊山曰く、世の文を作る者、類ね鍛鍊を喜みて以て奇と爲し、孔子の詞達の旨を究めず、剽竊を事として以て工と爲し、周子の文以て道を載るの說を識らず、言ありと雖も世に補ひ無し、世に補ひ無ければ、徒に工なるも奚ぞ益あらんと、

顧澄陽曰く、何仲默先生言ふと有り、漢人の文は文に工なるも道に昧し、故に其言謗にして據る可らず、疵ありて訓す可らず、宋の大儒は道に知るも文に嗇なり、故に輔に循ひ訓を守るに長するも、事を比し類を聯ねて其未發を開くと能はず、故に嘗て病ふ、漢の文は其道駁なり、宋の文は其道拘なりと、意ふに此れ確論云々、

顧亭林曰く、文の天地間に絕す可らざる者あり、曰道を明にするなり、政事を紀するなり、民隱を察するなり、人の善を道ふを樂むなり、此の若き者は天下に益あり、將來に益あり、一篇多きは一篇の益多し、若夫れ怪力亂神の事、無聲の言、勦襲の說、諛佞の文、此の若き者は、已に損あり、人に益なし、一篇多きは一篇の損多し、

魏勺庭曰く、文を作るには須く先つ其益ある者を爲すべし、天下後世に關係するの文は、名は立言たりと雖も、德と功と俱に見はる、また我輩貧賤中得志の事なり、

又曰く、夫れ文章は六經四書而下、周秦諸子、兩漢百家の書、體に於て備はらざる所無し、後の作者此に乏かざれば彼に乏く、而して唐宋大家は則又其書の精なる者を取り、參和雜糅、古人を鎔鑄して以て自ら成す、其勢ひ必ず以て更に加ふ可らず、故に諸大家より後數百年間、未だ一人の格調を獨創して古人の外に出る者あらず、然れども文章の格調は盡るとあるも、天下の事理は日に出て、窮まらず、識の庸衆に高からず、事理の天下國家の故に關係するに足らざるときは、奇文ありて

左史韓歐陽と竝立して二無しと雖も、亦作るとなかるべし、古人俱に在り而して吾れ徒に之に似せば、古人の再見に過きず、願て必ず其篇牘を多くして以て後世の耳目を勞苦するは何の爲ぞやと、此れ眞に有識の言なり、

第五 占地歩則

古人は文を作るに專ら地歩を占む人の高處に在りて立つを要し、平處に在りて行くを要し、闊處に在りて坐するを要するが如し、韓愈之の與于襄陽書は隱君子の道を以て自ら許し、蘇明允の上田樞密書は直ちに天の我に與ふるを以て自ら任ず、此皆地歩を占むる處なり云々、

徐萬資曰く、趙陀の報文帝改帝號書は、處々文希の書と針對す、而して婉順の中に于て、却て極めて自ら地歩を占め、絶へて一引咎の言を作さず、字裏行間、皆英雄の氣を帶ふ、之を左氏國策の中に置くも、亦當に目して上品と爲すべし、

李九我曰く、謝靈山謂らく、韓文公文を作るに專ら地歩を占む、道學解の中間數段、設難中に于て寓目任意、地歩最も高きを見ると、

唐介軒曰く、韓文公亂を脫して徐州に至る、張僕射憐みて之を辟す、而して初めて牒を受け、即ち出入の細事を借りて上書す、自ら地歩を占むると雖高し、其實て依

違苟徇せざるの意、行間に奕々たり安んぞ國士を以て之を待たざるを得ん、

樓迂齋曰く、子厚の晉問、山河よりして馬、曰く木、曰く魚、曰く鹽、一節は一節よりも細なり、晉文公の霸業に至りて盛んなりとす、然れども道を以て之を觀れば、亦何ぞ貴ふに足らん、却て一項最も貴ふべき者あり、曰く堯の遺風なり、此に至りては則ち前面の擧るところ、以て盡く廢すべし、此は是れ善く地歩を占むると一著最も高し、特地留めて後面に在りて說く、譬へば賈人の善く物を售る者、必ず肯て先つ好底を將て出て來らざるが如きなりと、

徐文昭曰く、柳州の乞巧文は此亦昌黎の送窮の意なり、高く地位を占むるは柳は韓に遜す、沈鬱遒茂なるは韓は柳に亞けりと、韓文の善く地歩を占むるは、殆んと古今獨歩ともいふべきか、

茅鹿門曰く、相州畫錦堂記題もと一俗見なり、而して歐陽公却て中に於て第一層の議論發明を尋ね出せり、古への文章家地歩を占むると此の如し、

魏勺庭曰く、蘇明允の上田樞密書、豪邁質するに足る、然れども自ら地歩を占め、峻贈人に逼り、人をして忌て厭を生せしむ、蓋既に進干求知の事を爲して、而も又傲

岸不屑の言を爲すなり、八家中昌黎傳を作りしより、而も近世歩を學ふ者愈厭惜すべしと、此も亦一理あるの言なり、文を學ふ者知らざる可らず、

第六立論正大則 凡そ學者文を作る、須く議論正大にして、臺閣の氣象あるを要すべし、方に佳なり、方遷志の釋統の如き、秦晉を舉げ、隨て之を并せ斷く、議論何等の正大なる、場中に此等の文字あれば、主司も自ら當に刮目すべしとなり、

瞿昆湖曰く、文なる者は心の聲なり、故に其文を閲せば、以て其人を知るべし、吾れ初め未た荆川方山の面を識らず、而して但荆川の文、理路に根據し、正大明顯なるを讀むときは、則ち其人必ず道を樂み中を坦にし、智の物先に在る者なるを想見する也、方山の文、爽塏迅發して、沈著痛快なるを讀むときは、則ち其人必ず高睨闊步して、眼一世を空ふする者なるを想見する也、已にして其人に接するを得るに、各其文の如し、然れとも荆川の墨卷は和平雅潔にして、極めて廟堂の風度あり、而して刻する所の窗下諸作は則ち精思苦鍊の迹あるを免れず、方山の墨卷亦佳なり、而して其餘の諸作は發揚蹈厲の氣あるを免れず、今二公の文を觀るに、各當に墨卷を以て主と爲すべし、蓋我朝三楊國に當りしより、尚ふ所の文體皆平正渾融

これを臺閣體といふ、凡そ斧鑿の痕未化せざると、怒張の氣未除かざるとあるは、皆入殺の文字に非ざるなり、

沈虹臺曰く、文章各心術に出ると雖も、實に兩等あるなり、山林草野の文あり、朝廷臺閣の文あり、山林草野の文は、其氣枯槁憔悴にして、其詞は瑣屑單薄なり、朝廷臺閣の文は、其氣溫潤豐縟にして、其詞は激昂明亮なり、王安國いふ、文章の格調は須く是れ官樣なるべしと、所謂官樣とは臺閣の氣に非ずや、昔し夏竦嘗て文章を以て盛文肅に謁せしに、文肅曰く、子の文章は臺閣の氣あり、異日必ず貴からんとありしに、後果して其言の如しとなり、

袁了凡曰く、文章の士は其胸襟を廣くし、其意氣を平かにして、其餘りある所を除するを勿く、務めて其未だ至らざる所を養ひ、一毫の乖戾も心に著るを勿く、詞氣の出る所をして、鏗然たると金の如く、溫然たると玉の如く、嫣然たると蘭人正士の朝に立つが如くならしむるは、これ所謂臺閣の文なりと、

呂晩村曰く、曾南豐の魏鄭公傳に書するの文、議論反覆八面都て到れり、議見既に正大に、其氣また雍容にして迫らず、渾厚にして露はさず、咀嚼するに餘味ひ存す、

宜かな歸震川のこれを誦すること百十遍なるも、釋すること能はざるやと、これまた其臺閣の氣象あるを贊嘆する者なり、

第七用意奇巧則

文章は意を用ふること凡庸なれば、人の厭を起し易し、須く人意の表に出べし、方に高手と爲すなり、李斯の諫逐客書の如き、人を借り己を揚げ、小を以て大に喩ゆ、別にこれ一種の巧思なり、能く此等の關竅を打破して筆を下せば、自ら世を驚かし俗を駭かさん、歐陽永叔の朋黨論も亦參看すべし、

黄山谷曰く、劉勰嘗て文章の難を論して、意は空に騁かへりて奇なり易く、文は實を證して工なり難しと云、此語亦これ沈謝輩が儒林宗主たりし時に、好んで奇語を作りしが故に、後生の立論此の如きなり、杜子美が夔州に到りし後の詩、韓退之が潮州より朝に還りし後の文章など、時に細削を煩はさずして自ら合せり、往年嘗て東坡先生に文章を作るの法を請ひ問ふ、東坡云、但禮記の檀弓二篇を熟讀せば、當に之を得べしとなり、既にして檀弓二篇を取りて讀むと數百過、然る後に後世文章を作ると古人に及ばざるの病を知ると、日月を覩が如し、文章蓋し趣安より以來、好んで奇語を作せり、故に其氣象衰茶、其病今に至りて猶在りと、文章もと

より奇巧を貴ぶといへども、其弊に至りては尤も知らざる可らず、

陳后山曰く、莊荀皆文士にして學ある者なり、其說劍成相賦篇屈騷と何そ異ならんや、楊子雲の文は奇を好みて、而も卒に奇なると能はざるなり、故に思は苦みて詞は艱なり、善く文を作る者は、事に因りて以て奇を出す、江河の行は順下するのみ、其の山に觸れ谷に赴き、風搏ち物激し、然る後に天下の變を盡せり、子雲は唯奇を好む、故に奇なると能はざるなりと、

張洪陽曰く、文章は人の言ざる所をいふは奇に非ず、人の發するん能はざる所を發せば眞に奇なり、理を發すること精透なれば、即ちこれを奇と爲す云々、

陸五臺曰く、近世の作文は、多く奇巧を事として、而も議論なし、吳國倫の李尙書集序は獨り議論を以て奇巧に代ふ、口を開けば便ち璠璵典謨を借りて論を立つ、文詞の燦爛たること翠羽明珠の如く、自ら是れ目を炫せりと、これ奇巧の病を矯むるの說なり、

魏東房曰く、語言味ひ無く面目憎むべきは、此れ唐俗人の病なり、而して專ら新奇譎怪を好む者の病はこれより甚し、奇を好み怪を好むは即是れ俗見なり、大雅の

士は然らざるのみ、蓋し奇好と譎怪とは相似て謬り易し、文を作る者最よく注意すべき所の者とす、

魏勺庵曰く、巧文刻深以て前賢の短を攻め、而して要害に中らず、新を取り奇を出し、以て昔人の案を翻へし、而して情實に切ならず、この二つは作る可らざる也、

第八造文平淡則　文章は意思の勝れる者、辭意樸にして文意高し、意思の勝らざる者辭意華にして文意鄙し、晉子固戰國策目錄序の如き、一の奇語無く、一の怪字無く、之を讀むに太奚元酒の如く、覺へずして至味存せり、眞に大手筆の文なり、宋潛溪の六經論も亦參看すべし、

蘇東坡曰く、孔子曰く言の文ならざるは之を行ふと遠からず、又曰く辭達するのみと、夫れ言の意を達するに止まるとする時は、不文なるが若きを疑ふも、是れ大に然らざるなり、物を求むるの妙は、風を繫ぎ影を捕ふるが如し、能く是物をして心に了然たらしむる者、蓋し千萬人にして、一も遇ざるなり、而るを況んや能く口と手とに了然たらしむるものをや、是をこれ辭達と謂ふ、辭能く達するに至るときは、文用ふるに勝ゆ可らず、揚雄好んで艱深の辭を爲して以て淺易の既を文る、

もしこれを正言せば、人々之を知らん、此れ正に所謂雕蟲篆刻なる者、其太玄法言みな是物なり云々、又曰く凡そ文字は少小の時は、須く氣象をして崢嶸に彩色をして絢爛ならしむべく、漸く老ひ漸く熟して乃ち平淡に造る、其實は是れ平淡なるに非ず、乃ち絢爛の極なり、

黃山谷曰く、文字は工なり難し、惟書を讀み多く貫穿せば、自ら當に平淡に造るべし、且之を置き、董賈劉向の諸文字を勤讀すべし、議論文字を作るとを學ふには、更に蘇明元の文字を取て之を讀むべし、古文は氣質の渾厚なるを要す、太た雕琢すると勿れと、

陳龍川曰く、大凡そ文を作るには、必ずしも好語言を作さず、意と理と勝れるときは、文字自然に衆を超えん、故に大手の文は、詭異の體を爲さずして自ら宏富なり、險怪の辭を爲さずして自ら典麗なり、奇は純粹の中に寓し、巧は和易の內に藏す、文を善くせざる者は、高きとを理と意とに求めずして、務めて異なるとを文彩辭句の間に求む、則亦陋なり云々、

武叔卿曰く、善く文を爲す者は、意を修め、善く文を爲さゝる者は詞を修む、意を修

むる者は、意到りて詞自ら工なり、詞を修むる者は、詞勝りて意反て隱る、

吳無障曰く、意思七八分を見得て、而も辭以て之を達するに足らざる者は、これ辭達せざるの病に非ず、仍是れ意の徹せざるの病なり、朱子謂らく、憤とは心に通を求めてまた得ず、排とは口にいはんと欲して未だ能はず、畢竟これ心に通を求めて未だ得ざるのみ、若し徹頭徹尾に底蘊を洞見せば、豈これを其口に出すと能はざるものあらんや哉と、

馮具區曰く、文體を譚する者平淡を亟言せり、而して平淡は言ひ易かるべけんや、坡公云、漸く老ひ漸く熟して乃ち平淡に造る、平淡に非ざるなり、絢爛の極なりと、平淡は必ず神奇に始まり、而して僞平淡は則ち神奇に反す、今の士は僞平淡を薄んして競ふて僞神奇に趨る、而して衡文なる者又僞神奇を薄んじ、却て僞平淡を收む、蓋し兩ながら失せり云々、

周寅所曰く、文の奇にして且つ麗なるは今日に至りて極まる、文の敝も亦今日に至りて極まる、然りと雖も、彼れ固に未能く奇と麗とならざるなり、夫れ奇と麗とは何ぞ文病と爲すに足らん、彼れ惟詭にして奇に似せ、靡にして麗に似するは、洗

の濫にして、文の敝なる所のみ、余謂ふ高論弘裁は奇なり、今の古を掇け今を競ひ、危側以て異を炫する者の若きは、則ち詭にして奇に非ず、深文隱蔚は麗なり、夫の義を瘠し詞を肥し、標渺以て俗に傳ふる者の若きは、則ち靡にして麗に非ず、奇と詭と相懸するなり、麗と靡と相懸するなり、奇を蘄ひて而も詭を得、麗を蘄ひて而も靡を得るは、猶これ虎を畫きて尨に類するが如し、故に曰く敝也と、それ孰れか夫の麗の靡に非ず、靡の麗に非ざるを知らんや、又孰れか夫の不奇の奇不麗の麗を知らんや、嗚呼推輪變して大輅と爲り、積水漸して凝氷と爲る世の趨るやそれ誰か波然たらざらん、而して致塾なれは則ち極まる、致極まれは則ち返る、今極まれり、安んぞ返りて平淡に之かざるを知らんや、夫れ平淡は奇麗の對なり、是れ文の自て始まる所なり、廢す可らざるなりと、

袁了凡曰く、文を善くする者は平淺の辭を以て精深の意を發し、識者をして其意を得、不識者をして其辭を得せしむ、試に論語孟子を看よ、其詞何等の平正なる、其意何等の精深なる、此れ萬世作文の軌範なり、

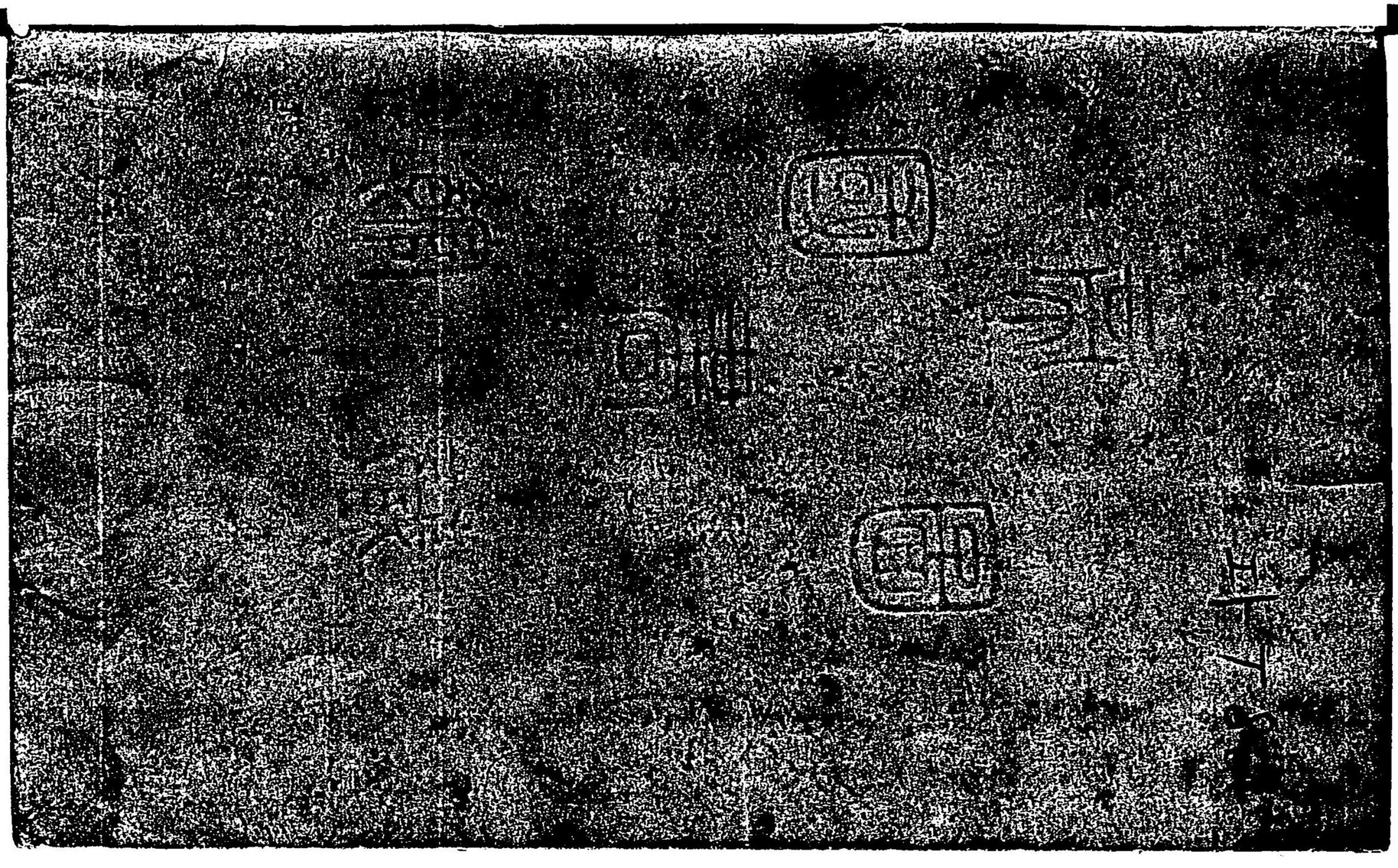
魏勺庭曰く、文を作るには、先つ意を立るを貴ふ、必ずしも異を求めず、但須く獨到

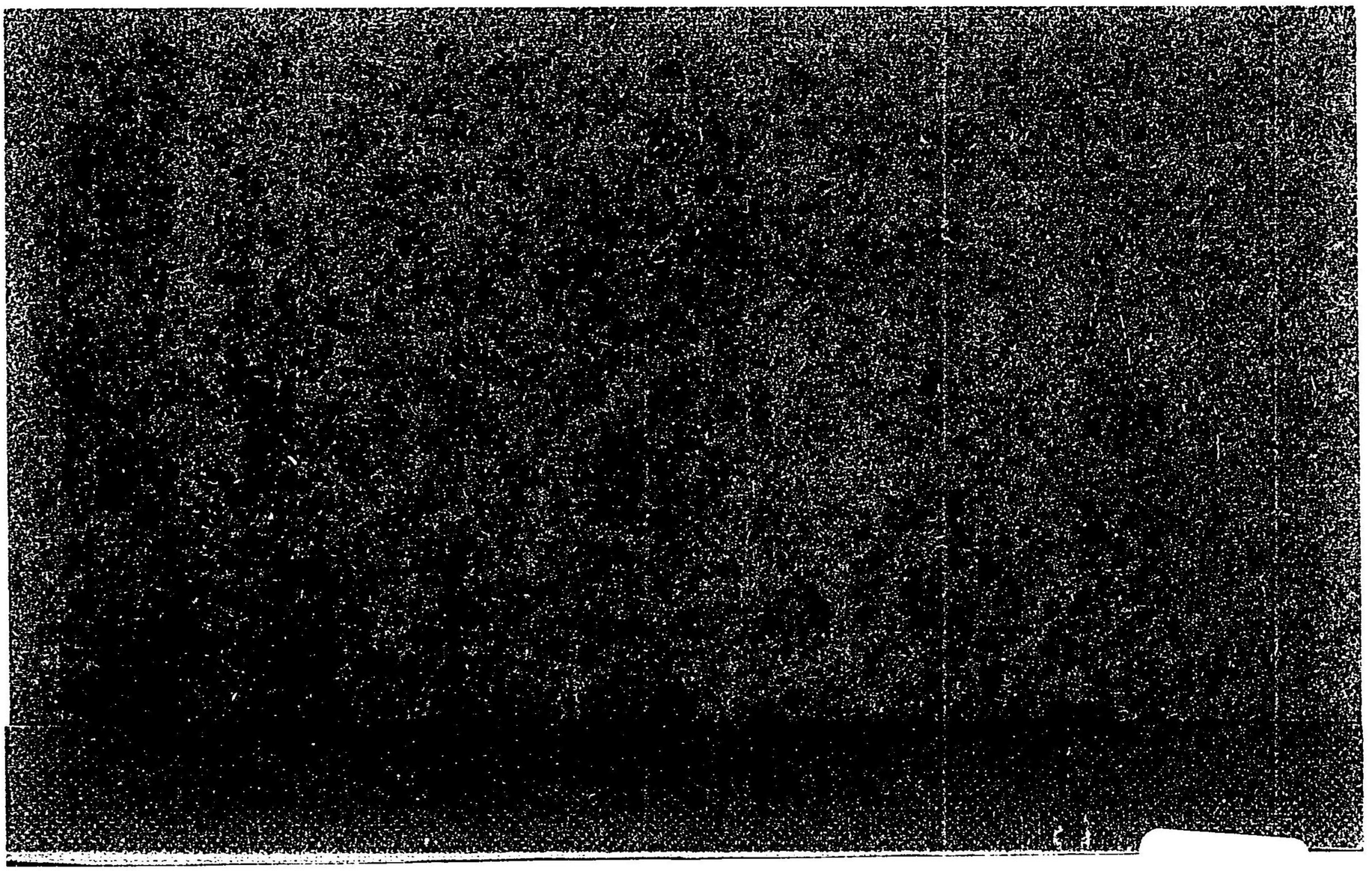
14
229

の處あるべし、便ち人に異なるに足れり、然れども既に好意あれば、須く思ふべし、此意如何にして方に能く發し得て透確なる、何の陪賓を用ひ、何の引證を用ひて、前後當に如何なる位置にすべしと、一々古人の法度に合せんとを要す、斯くして文成れば乃ち粲然として觀るべし、又曰く、少年文を作るには、當に才氣をして怒發し、奇思をして縱橫し梓澤に入か如く、沓潮を觀か如く、駿馬の坂を馳るか如く、健鶻の空を摩するか如くならしむべし、一時に橫絕せしむるを要す、然る後に和するに大雅を以てし、渥くに平淡を以てし、至醇に歸して、而も猶隱然則ち可らざるの氣、掩抑す可らざるの光あるか如んば、斯に至れりと爲す云々、

姚姬傳曰く、古人文章の體は一類にあらず、其瑰瑋奇麗の振發も亦其盡く無意に出ると謂ふべからざるなり、然れども要するに、是れ才力氣勢これを驅使するの必ず至れる所にして、勉力して、これを爲すには非ざるなり、後人は勉學累積して、紙上に賁炎の如きものあるを覺ふ、故に文章の境は平淡より、佳なるは莫し、語を措き意を遣るも、自然生成の若き者有り、此れ無甫の文家の正傳たる所以なりと、其平淡を推重するや至れりと謂ふべし、

支那文學(文章講話)終





14
229

哲学館講議録

支那文学（文章講話）

国立国会図書館

084736-000-5

14-229

支那文学（文章講話）

日下　寛／述

M34

DBA-0066

哲學館第一學年度
第一學科講義錄 支那文學（文章講話） 日下寶

14
229